
ゼロの使い大魔王

rdnt

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い大魔王

【Nコード】

N9537M

【作者名】

rdnt

【あらすじ】

プロローグ&第01話、一部修正しました。小ネタの部分です。申し訳ありません。

ゼロ魔の世界にドラクエ?の大魔王ゾーマが召還されて。といった内容の、クロスオーバー作品です。

物語の進行は、ゼロの使い魔がベースとなっています。

星の数ほど存在する、ドラクエ?の平行世界。その中の、適正持ちゾーマが題材。

プロローグ（前書き）

修正しました。ギャグ物です。

プロローグ

「バラモス様を見送ってきた……大魔王様は、また例の発作か？」

声はすれども人の姿は見えない。

目につくのは、5メートルはあろうかという石で出来た彫像が2体。

1体が歩き、片方に近づきながら話しかけている。

「じさんの通りさ」

わっはっはっ！

先ほどとは違う側にいる石像が、しかめっ面をし、奥の間を指しながら返事をする。

どうやらこの石像たちは動き、喋ることが出来るようだ。

この城においてそれら石像は、個体の区別なく、総称して”だいまじん”と呼ばれている。

分かりにくいいため、持ち場で待機していた方をだいまじんA、歩いてきた方をだいまじんBとしよう。

「『ほろびこそ わが よろこび』なんて言っていた大魔王様はどこいったのかね」

だいまじんBが、心底嘆かわしいと大仰なジェスチャーをする。

そなたらの幸せこそ、我が悦びじゃ。

「不敬罪で殺されても知らんぞ」

「はは、不敬罪だって？ 大魔王様がそれくらいの気概を見せてくれれば、俺だって安心して死ねるさ」

だいまじんBの批判を諫めるAであるが、少し思うところもあるらしい。

「ルビス……様の呪いも解かれたし、確かに俺たち、どうなるんだろうな……」

これこれ、わしを取り合って喧嘩はやめぬか。

精霊ルビスが創ったと言われるこの世界、アレフガルドは、現在光に満ち溢れている。

大魔王がルビスを封印していたころは、闇で閉ざされ朝がこない、とても住みよい大地であった。

しかし大魔王がにんげん文化に触れたことを切欠に、あるうことが大魔王自らルビスの封印を解いたのだ。

『にんげんを害すること許さず』

大魔王によるこの法令は、魔物たちにとって衝撃をもたらした。にんげん憐みの令と呼ばれ、にんげんへの危害禁止はもちろん、食料はにんげん以外から得ることとなったのだ。

それは、正当防衛でない限り全てに適応される。

大魔王とルビスの話し合いにより、一部過激派を除き、にんげん側から仕掛けることはなくなった。

施政当初、魔物の反発は大きかったが、大魔王に表立って逆らう者はいなかった。

隠れて人間を食べようとした”ひとくいばこ”は、大魔王の怒りに触れ粛清された。

にんげんと魔物の間に、相互協力や不可侵といった協定が生まれたのだ。

現在もつとも苦勞しているモンスターは誰であるか、とアンケートを取れば、バラモスが不動の1位であろう。

バラモスとは、他世界を治めるほどの魔王であるが、大魔王の忠実なしもべである。

その魔王バラモスが、今回の法令より親善大使として、にんげんと度々コンタクトを取っているのだ。

想像してみてほしい。

目の前に美味しそうな料理の数々が並んでいるにも関わらず我慢

し、あまつさえその料理との交渉をさせられている、権力者の姿を。

はたしてそんな苦勞をしながらも、魔王バラモスが持つて帰ってくる文化とはなんであろうか。

答えは、アレフガルドの文人、ノボルヤマグチ原作の小説とアニメ。『ゼロの使い魔』である。

まだルビスを封印していたころ、大魔王はその作品に出会った。そしてこの作品継続のため、世界に光をもたらそうと考えたのである。

大魔王が初めてこの作品を閲覧したとき、衝撃のあまりこう語ったという。

『ルイズ可愛い！ 見て！ すごくかわいい！』

ま、まさかこれは……！！

だいまじんBは、今日も大魔王の間から漏れてくる、奇怪な言葉に辟易していた。

バラモスが『ゼロの使い魔』の新作を持ってきた日、大魔王は決まってこの発作を起こすのだ。

間違いない！　これは、わしの時代じゃ！

誤解の無いように訂正しておく、部屋以外で他魔物と接する大魔王は、常識大魔王である。

公務においても部下に対し、大魔王の威厳と風格を持って接している。

まっておれ、ハルケギニア！！

しかし、自室だからこそ曝け出せる自分、とでも言うのであろうか。

独り部屋に籠った大魔王は、誰にも聞かれていないと思い、感情のまま発作を起こすのだ。

もちろんこれは、大魔王の沽券に関わるとして、バラモスとだいまじんABの胸のうちにしまっている。

魔王軍上層部しか知り得ない事実だ。

そして、だいまじんの門番という役職上、聞きたくない声が意図

せず聞こえてきてしまう。

だいまじんBは当初こそ、この『ご乱心』に心中で涙したが、その涙は当の昔に枯れ果てていた。

「だいたい……」

なおも愚痴を漏らそうとするだいまじんB。

それを、だいまじんAが口に指を当てるジェスチャーで止める。

「……おい、ちょっと待て」

フロアは静寂に包まれていた。

これが何を意味するのか。

つまり先ほどから扉の内より聞こえていた声が、自分たち以外の音が途絶えていたのだ。

「まさかゾーマ様になにか……！」

だいまじんAとBに戦慄が走る。

自分達の見張っている場所からでないと、常識から言えば、大魔王の間に入ることは不可能である。

しかし、大魔王を害そうとするにんげんは少なからずいる。

それらにんげんが、何らかの手段を用いて、中へと入ってきた可能性があるのだ。

「ゾーマ様！ 失礼します！」

主がお楽しみ中に部屋へ入ることは不敬とされるが、内心の不安は抑えられない。

躊躇することなく扉を開け、映る光景にだいまじんAとBは愕然とした。

「ゾーマ様が……いない……？」

大魔王の間には、誰もいなかった。

つけっぱなしのアニメ『ゼロの使い魔』や小説『ゼロの使い魔』が乱雑と転がってはいるものの、

大魔王が隠られるスペースなど存在しない。

それは大魔王ゾーマの消失を意味していた。

プロローグ（後書き）

インターネットに適した、見やすい方法を、模索します。

第01話 また失敗かよ（前書き）

修正しました。

第01話 また失敗かよ

「おい！ また失敗かよルイズ！」

「さすが『ゼロ』だ！ 召喚すらまともに出来ないんだな！」

青い空、吹き渡る風。

そんな牧歌的な草原に、マントを着た少年少女たちがいた。

彼らは、まだ砂塵がもうもうと立ち込めている場所にいる少女に、冷やかしの声をかけている。

先ほどから同級生に囃し立てられている、ピンクブロンド髪の少女。

彼女の名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールという。

ルイズはこの召喚に賭けていた。

彼女はどんな魔法も失敗してしまう。正確には『爆発』する。水系統の魔法であっても、一般に簡単と言われている、コモン・マジックであってもだ。

その分彼女は努力し、学院の筆記も常に上位の成績をキープして

いる。

だがここ、トリステイン王国では、魔法が特に重視されていた。筆記ではなく実技の、である。

それはトリステイン魔法学院も例外ではなく、この『使い魔召喚の儀』には、彼女の進級がかかっていた。

「ミス・ヴァリエール……残念ですが今回は……」

「お願いですミスタ・コルベール！ もう一度、もう一度召喚をさせてください！」

ルイズの悲痛な訴えに、コルベールと呼ばれた者が沈痛な面持ちをする。

教師である彼は、ハゲてはいるがとても生徒思いである。ルイズが努力家であることを知っていた。

数十回と失敗しても、次に成功すれば良いと。どうにか進級させてあげたいと考えていた。

「ええ、ですが今日は他の授業が押しているので、明日にでも再試験を……」

ここでコルベールは、異様な魔力の流れに気付く。

ルイズから流れているわけではない。彼女の目の前にある『砂煙』から、膨大な魔力を感じたのだ。

「ミス・ヴァリエール。もしかすると、召喚は成功かもしれませんが」

彼はそう言って、杖に手をかけた。

砂煙があけると、そこには大柄な何かが立っていた。

何かと表現したのは、人型のように見えるそれは、あきらかに人ではなかったからだ。

猛牛のような角が左右に2本つき、中心に目のようなものがある兜、山吹色の法衣と紫色の外套を身につけている。

身の丈は3メートル（メートル）ほどあり、肌は青黒く、顔は骸骨をイメージさせた。

よく見ると首から髑髏のアクセサリーを提げている。

この禍々しい存在に対し、コルベールは相手から見えないように杖を握った。

生徒たちに危害を加える素振りを見せれば、すぐにでも攻撃できるようにと。

「あんた誰？」

圧倒的な威圧感に、言葉を失っていたルイズであったが、気を取り直すとそう口にした。

どれほど強そうに見えても、どれだけ召喚できたことが嬉しくても、相手はたかが使い魔である。

主従関係はしっかりしておかないといけない。何事も初めが肝心だ。

しかしその質問に思わぬ返しが来る。

「ルイズ・フランソワーズ、よ……」

深い、地の底から聞こえてくるような、重々しい声が響き渡る。だがルイズはその声色ではなく、返事の内容に驚いた。

この大柄な何かは、名乗る前から自分の名前を当ててきたのだ。

「貴方は、どのような種族でしょうか……？」

ルイズの視界の端から杖が覗いた。

隣では、戦うことも辞さないといった面持ちのコルベールが、杖を構えていた。

未知なる物へ興味ではなく恐怖を抱く。コルベールにとって初めての体験であった。

「コルベールか、そう構えずともよい……。わしは、大魔王ゾーマじゃ」

「だいまおう、ですか……？」

コルベールが聞きなれない単語に眉をしかめた。

自分の名前を言われるだろうとある程度予測していたため、今はそれ以外の情報を得ることに専念する。

「さよう。魔物たちを統べる王、魔王。そしてその魔王すら支配下に置くもの……それが大魔王」

コルベールの頭に、オーク鬼やトロル鬼といった魔物が思い浮かぶ。

それらを束ねる者の、さらに上位に位置すると言うのだ。

大魔王ゾーマと名乗る者の言うことは、俄かに信じられるものはなかった。

だが、目の前の存在が、凄味が、それが真実であると語っている。

コルベールの滑りやすい頭に、汗が伝った。

「貴様がいくらわしを警戒したところで……貴様の『光の玉』程度では、わしの『闇の衣』を外すことはできぬ」

意味はわからないが、ゾーマの指先から察するに、どうやら頭のことを馬鹿にされているらしい。

そう感じたコルベールは巨大な炎の蛇を作り出そうとし、またし

てもゾーマのセリフによって、氣勢をそがれることとなる。

「なに、なってやろうではないか。ルイズの、使い大魔王にの」

「本当に!？」

ルイズが歓喜の声をあげる。

今まで話を聞いていて、理解できたことがある。

この使い魔、いや、この使い大魔王は非常に強いに違いない。

『メイジの力量が知りたければまず使い魔を見よ』という言葉がある。

このゾーマなる者を従えることが出来たあかつきには、誰も私を馬鹿になど出来ないはずだと。

「ミス・ヴァリエール、やり直しを要求します」

コルベールが抗議の声をあげる。

このような邪悪なものが、素直に従うとは思えない。

何か裏がありそうな、得体の知れなさを感じさせる。頭を馬鹿にもされた。憤懣遣る方なしである。

「ミスタ・コルベール、それは出来ません。召喚の儀は神聖なもので、やり直すなどという行為は許されない筈です」

しかしコルベールの私情を多分に含む異議申し立ては、にべもなく却下された。

ゾーマに目をやったルイズは、ある問題に気付く。

「じゃあコントラクト・サーヴァント>>契約<<をするから、跪いてもらえる？」

ルイズが言ったこの行為に、主従をはっきりさせようなんて特別な意味はない。

コントラクト・サーヴァントは呪文と口付けによって行われる。
153サント（センチ）のルイズと3マイルのゾーマでは、身長差がありすぎて契約できないのだ。

ゾーマは心得たりと膝について、ルイズに目線をあわせた。

コルベールの指摘はあながち間違いではなかった。
害そうといったたぐいの悪意ではないが、ゾーマには裏があつたのだ。

ゾーマの野望。

それは、ハルケギニアの女子とキャツキヤすること。
まずはルイズとのファーストキスから、一人と一大魔王の恋のヒストリーを作ろうと企んでいた。

平静を装ってはいるものの、内心は欲望にまみれ、忠実なのだ。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ。」

契約の言葉と共に、ルイズがゾーマと唇を交わす。

ゾーマにとって、計画通り。

普段から口角が高く、邪悪な笑みを浮かべているゾーマであるが、このときばかりは通常より1サントほど高く上がっていた。

のた打ち回る大魔王ゾーマの姿。

生徒達にあざ笑う声。

ルイズがふと横に目をやると、コルベールもうつすら笑みを浮かべていた。

『メイジの力量が知りたければまず使い魔を見よ』という言葉がある。

なんだか泣けてきた。

ルイズは思った。

第02話 みなさん無事

「みなさん無事に召喚できましたね。さて、戻りましょうか」

コルベールが授業終了を告げる。

「お前は歩いてこいよ！ ぶつくく、その、大魔王と一緒にな！」
「レビテーションさえ出来ないルイズ！」

マント姿の同級生たちが魔法を使い、一斉に空へと浮かんだ。
ルイズがその様子を苦々しげに見ていると、ふいに影がさした。

「どうしたルイズ・フランソワーズ。我々も彼らを追って行くつもりはないか」

隣に立ったゾーマが、ルイズより高い位置から話しかける。
ルイズにとって、何もかもがどうでもよくなっていた。

召喚できた喜びが、今じゃ使い魔にも劣る、この使い大魔王を見ているだけで胡散する。

優秀でなくても良い、他の使い魔と同じ程度であればそれで良かったのだ。

「……ルイズでいいわ。あんた飛んだりとか、そういった特技あんの？」

心底疲れたといった体で質問する。駄目で元々なのだ。何か一つでも特技さえあればと。

「制御して自在に飛ぶことも、目的地に一瞬で飛んで行くことも可能である」

「やっぱりね……じゃあ歩いて……て、え？ あんた飛べるの？」

ルイズの顔が華やいで、枯れた。

この使い魔は、大魔王だとすぐ嘘をつく。今やピノキオより信用できない。

「じゃあその一瞬で飛んで行くつてのをやってみなさいよ」

「だが、これには色々問題があつてな。一瞬で飛んで行くには行けるが……」

これである。

ルイズは考えた。どうやらこのゾーマは、飛ぶなんて出来ないのだろうなと。

行けると言っただあとに、何かといちゃもんをつけ、煙に巻こうとしているのだと。

「そんなこと言ってどうせ出来ないんでしょ？ はいはい大魔王は

「凄いわね」

胡乱げな目を向け、言い捨てるルイズ。

「ほら、さつさと歩いて行くわよ」

「ふむ、疑われたままというのもつまらんな。まあいいわ。PTを組めば連れて行ってやろう」

「ばーてぃー？」

今度は聞いたこともない言葉を使って、有耶無耶にしようというのであるのか。

「左様、一緒に行動しようと思っただけでよい」

「……まあいいわ。今回は協力してあげるけど、これで出来なかったら、わかってるんでしょね？」

ルイズは半信半疑ながらも、行動を共にしようと思ってみる。するとどうだろう。

パーティーというのはよく分からないが、使い魔とリンクするような、そんな感覚が満ちたのだ。

「ふむ、無事PTは組めたようじゃな」

ゾーマは満足気に頷き、呪文について簡単な説明をはじめた。

「今から使う呪文は本来、目的地を知らねば効果を發揮しない。し

かし、幸いにしてわしはここ、ハルケギニアの地理を熟知しておる。
……では見せようか。我が『じゅもん』を……」

辺りに魔力を含んだ風が立ち込め、ルイズたちを包んだ。

「ルーラ！」

ゾーマがそう”となえる”と、ルイズとゾーマの体が、高く浮か
び上がった。

そしてある程度上昇したところで、二人の体は空間の裂け目へ、
次元の狭間へと吸い込まれたのだ。

ルイズは「あっ」と言う間もなく、気付けば、とある建物の目の
前に立っていた。

「あっ、えっ……あれっ？　ここもしかして……ほんとに……？」
「どうじゃ、嘘ではなかったであろう？」

トリスティン魔法学院をバックに、ゾーマが自慢気に言った。

「すごい……すごい！　ほんとに凄いわ！　ああんた、やればできる使い魔じゃないの！」

興奮のあまり台詞を噛みながらではあるが、ルイズは今度こそ素直に喜んだ。

そして、隣にすら聞こえないほど小さな声で、思いを口にする。

「瞬間移動できる使い魔なんて、いや、そんなことスクエアメイジにすら無理なはずよ。目の前の使い魔は、恐れ多くも『始祖プリミル』に匹敵するかもしれない力を持っているわ。何か魔法の使用を渋っていたみたいだけど、こうやって主人が手綱を握って操縦すれば良いのよ」

ルイズがこれから訪れる”輝かしい未来”に思いを馳せていると、遠くから自分を呼ぶ声が聞こえた。

「ミス・ヴァリエール！！」

ようやく到着したのであろうか。

コルベールが輝く玉のような汗を、輝く玉のような頭に浮かべながら、二人へ駆け寄っていった。

ふふん、飛ぶよりも速く学院にいる私たちに驚いているのね。

ルイズはそう判断し、状況を説明しようとする。

「ミスタ・コルベール、この召還した使い魔、いえ、使い大魔王は、とてもすごい力を……」

「一日もどこに行っていたんですかミス・ヴァリエール！ 心配で、夜を徹して探し回っていたのですよ！」

「えっ……？」

この喧騒に、学院から学生たちが出てきた。

そこには、ルイズと一緒に召還の儀を行った生徒の顔も混じっている。

「えっ……？」

「だから言おうとしたであらう。ルイズよ」

今まで黙っていたゾーマが口を開く。

「ルーラはな、世界の果てや、さらに次元すら超える便利な呪文であるが、到着は必ず次の日の朝になるのだ」

「き、ききき聞いてな……」

「わしを『操縦』しようとした主人によって、言わせてもらえんかったからの」

「ここここ……」

ルイズはその場に固まった。

コルベールはその様子を疲労からくるものと考え、気遣いの声を

ルイズへとかける。

「なんにしても無事で良かったですよ。さあミス・ヴァリエール……ミス……？」
「……………」

先ほどから養鶏場のような音を発し、放心していたルイズが、キツとゾーマを睨みつけた。

「…………、この……バカ大魔王……っ！！！！」

トリスティン魔法学院の朝が、ルイズの”爆発”魔法によって始まる。

『この世の果てや異世界でも一日で行ける』

実は結構凄いことをさらりと述べたゾーマであるが、頭に血がのぼっているルイズや、徹夜でルイズを探し続け、精根尽きていたコルベールはそのことに気付けなかった。

ただ一人の少女を除いて。

その少女は、遠巻きに様子を窺っている学生たちの中でも一際背

が低く、青い髪をしていた。

第02話 みなさん無事（後書き）

ドラゴンクエスト？仕様の、ルールです。

第03話 なんたること

「なんたることだ……」

授業に行くと言ったルイズを見送ったあと、ゾーマは、自らの犯した失態に煩悶していた。

「召還次の日の朝は、シエスタの洗濯を手伝うという重要イベントがあつたではないか……」

原作がふにやふにやになるほど読み返したゾーマは、これから起こる出来事を『知って』いる。

朝にはシエスタという名の、脱げばすごいと噂の、黒髪メイドの、高感度をあげるイベントがあつたのだ。

平民の朝は早い。それは、脱げばすごいシエスタといえど、例外ではない。

ゾーマが洗い場に辿り着いたときにはすでに、洗濯物は干され、シエスタの姿はどこにもなかった。

失態とは、ルイズにのせられてルーラを唱え、昨日の晩から朝までの時間を、ふいにしてしまったことだ。

飛んでいく方向こそルイズの意図したものではなかったが、見事ルイズに操縦された、と言って良いだろう。

さらにゾーマにとっての誤算があった。

それは、大魔王の身体的特徴に関する関係がある。

ゾーマの身長は3メートルと高く、容易に学院内へ入れるものではなかったのだ。

召還の次の日は、使い魔と触れ合いながら授業を受けるというものがある。

しかし、ゾーマの巨体を見たルイズから「授業が終わるまで学院の外で待っているように」と言いつけられてしまった。

このときばかりは、ゾーマは自らの立派な体躯を恨んだ。

「猫背になって小さくしておるから!」

とルイズに懇願したものの、素気無く棄却されてしまった。

ゾーマがどうしたものかと考えていると、自分を監視する視線に気付く。

「出てきてはどうか。タバサよ」

数刻の間をおいて、一本の樹の陰から、一人の少女が姿を見せた。

タバサと呼ばれたその少女は、短い青色の髪をしており、自身の低い身長に不釣り合いな、大きな木で出来た杖を手に行っている。

整った、美人とも言える顔立ちをしているのだが、その表情には現在、警戒の色が浮かんでいた。

「……あなたは、何者？」

タバサは、ともすれば聞き取り損ねるほどか細く、透き通った声で問い質した。

「言わなかったか？ わしは大魔王ゾーマじゃ」

「……ちがう。昨日、彼女と一緒に消えた魔法……杖も握らず、先住魔法ほど長い詠唱もなかった」

タバサは他の生徒たちが学院へと帰る中、ルイズとゾーマの会話に耳を傾けていたのだ。

「……あれは、ハルケギニアの魔法じゃない」

「その通りじゃ。あれはわしの世界の、そう、魔法であるな」

「……どんなに遠くでも一日で行けると。それは、何人まで？」

「ここでようやく、ゾーマにも得心がいった。」

タバサはこう聞きたいのであろう。『かあさまを連れて安全な場所まで逃げられるの？』と。

諜報の気配がないことを確かめたゾーマは、それに返事をした。

「何人でも可能だとも、タバサよ。いや、シャルロット・エレーヌ・オルレアンよ」

タバサの肌が粟立った。この者は、どこまでわたしのことを知っているのだろうか。

タバサ。本名をシャルロット・エレーヌ・オルレアンという。

オルレアン家は、ハルケギニアの大国、ガリアの王族であった。『であった』としたのには訳がある。

無能王とも呼ばれる現王ジョゼフの王弟であり、彼女の父でもあるシャルルは、兄ジョゼフによって暗殺され、もうこの世にいない。

彼女の母親も時を同じく、ジョゼフの指示で『心を壊す毒』を飲まされ、軟禁された。

公式には、ジョゼフが手を下したとされていないが、ジョゼフの関与はあきらかである。

さらに容赦のないことに、オルレアン家は、不名誉印の烙印が押され、王族ではなくなったのだ。

これを『よくある継承者争い』と言ってしまえば簡単だが、残された娘にとっては、とても割り切れる問題ではない。

元々明るい性格であつた彼女だが、この日から感情を表に出すことはなくなった。

ジョゼフに対する復讐心、心を壊した母を救う秘薬はないか、それが彼女の心を占めているのだ。

復讐をいつか果たすため、身分を隠すため、彼女は自身をシャルロットと言わない。

心を壊された彼女の母は、以前娘にプレゼントした人形をシャルロットと錯覚し、シャルロットと呼んでいる。

その人形の名はタバサ。

かあさまが人形をシャルロットと呼ぶなら、わたしは、タバサを名乗ろう。

わたしは人形。かあさまに仇なす者を討ち、復讐を果たす、人形。

彼女がタバサを名乗ることは、そういった経緯があった。

タバサは、ゾーマが本名を知っているということは、その事情すら知っているのだらうと推測した。

貧弱だが得体のしれない使い魔。これが彼女の、ゾーマに対する印象だ。

「……タバサに戻そう。ではタバサよ。母を救いたい気持ちは知っているが、あいにくと今日は日が悪い」

やはり知っていた、とタバサは思った。

この使い魔は、昔物語で聞いたことのある、妖怪サトリのように心を読むのかもしれない。

だが心の中で『聞こえますか？ あーあー、聞こえますか？』と強く念じたが、ゾーマからの反応はなかった。

タバサは推理が外れたことと、少しの気恥ずかしさを覚えて赤面したが、今はそれよりも聞かなければならないことがある。

「……今日は、とは？」

今日じゃなければ良いととれる。

「今日は大事なイベントがある」

重々しく、真剣な口調で告げるゾーマ。

「しかし、タバサの協力を得られれば、すんなりと事は運ぶであろう」

「……見返りは？」

「母を救うこと、復讐にも手を貸してやろう」

ここまできて、タバサがこの申し出を断ることはない。

例え悪魔に魂を売ってでも、かあさまを救い、復讐を成す。

それが、タバサの決意なのだから。

第04話 ……決闘に

「…………決闘に同行？」

タバサが、ゾーマから要請された内容の確認をする。

なんでも今日、一人の浮気男のせいで、二人の女性が傷つくらしい。

その女性の内一人は非常に有能で、ぜひとも臣下に加えたい。タバサによってそうなるよう仕向けてほしい。

さしあたって決闘で浮気男をけちょんけちょんにするので、その現場を見せて大魔王の力を示すように。

ゾーマの話を要約すると、おおむねこんな感じだ。

これには、タバサも初めは反対した。もちろん決闘を行うことについてである。

色々と得体のしれないゾーマではあるが、こと戦闘能力となると、使い魔のルーンを刻まれて転げまわっているところしかタバサは見えていなかった。

しかしいくら反対しても、頑なに実行すると言ってきかないゾー

マに対し、これ以上進言してヘソでも曲げられたら困る、と断念したのだ。

仕方ない。いざとなれば、わたしがバレないように……。

心の中で独白するタバサ。

同級生にはあまり知られていないが、タバサは若干15歳にして、『シュヴァリエ』の称号を持つ『トライアングル』メイジである。ハルケギニアに住んでいる人に上記二つを聞かせれば、それは感嘆の声となって返ってくるだろう。

さて『シュヴァリエ』とは。『トライアングル』とはいったいなんだろうか。

ここハルケギニアにおいて、メイジのランクというものは、4種類に分けられる。

メイジは属性を合わせられる数によって、そのランクが決められるのだ。

一つしか行使できない者はドット、二つでラインと呼ばれる。
中堅以下と分類される貴族のほとんどが、この二種類のランクで
構成されていると言えるだろう。

そしてトライアングルとは、属性を三つ合わせることができる者
を指す。上流貴族に多いのがこの、トライアングルだ。

さらに上には、四つを合わせることができる最高峰、スクエアも
存在するのだが、ハルケギニアでスクエアまで登りつめた者は、一
握りの大物しか存在しない。

ちなみに貴族は、そのランクによって、ある程度役職を選ぶこと
ができる。

それは、際立った人格破綻者でもない限り、高ランクのメイジが
優遇されているということを指した。

つまりメイジのランクとは、貴族としての権力の強さにも影響を
与えるのだ。

ハルケギニアとは別の世界でよく言われる、学歴社会のようなも
のかもしれない。

学歴社会と全く違うのは、それが直接的な戦闘力、暴力にも影響
するということだろうか。

ドットやラインといった貴族でさえ、魔法が使えない平民にとっ
ては恐怖でしかないのだから。

タバサは若くして、トリスティン魔法学院に在籍している。

魔法学院の特徴として、ある程度年齢の違う生徒が同じ学年に混在する制度がある。

しかしその魔法学院においても、タバサと同じ二学年で、トライアングルに達した同級生は二人しかいない。

同年齢以下と限定するなら、少なくとも魔法学院には、彼女以外にトライアングルは存在しない。

これは彼女を、かなりの実力者と判断できる材料であろう。

次にシュヴァリエであるが、これは家柄だけで貰える称号ではない。

実戦を経験し、数多の実績を残したもののだけに送られる、コネクションだけでは決して手に入らない名誉ある位なのだ。

若くして父を亡くし母を害されてなお、復讐を成すために感情を押し殺し、憎い仇敵ジョゼフに仕え、任務を果たす。

その暗い過去が、皮肉にも彼女の魔力を増大させ、実績による称号を手に入れさせた。

そんなタバサにとって、同世代の生徒に悟らせず魔法を行使することなど、赤子の手を捻るより簡単なのである。

『バレないように助ける』と案じたタバサの言も、決して驕りからくるものではないのだ。

ゾーマは、かあさまを助けるのに必要な存在。協力して恩を売る。そう心に誓うタバサであった。

時は夕刻。魔法学院の中にあるアルヴィーズの食堂では、今日も生徒たちが揃い、食前の祈りを捧げている。

「偉大なる始祖ブリミルと女王陛下よ。今朝もささやかな糧を我に与えたもつたことを感謝いたします」

始祖ブリミルとは、ブリミル教における神の代理人であり、故人である。

キリスト教のイエス・キリストのようなもの、と考えていただければ想像に難くないだろう。

ブリミル信徒は『Brimir』に『an』をつけ、ブリミランと呼ばれる。

プリミランの生徒たちが唱和を終えると、食堂は徐々に騒がしさを増していった。

喧騒の中、一際大きな声で騒いでいる一団がある。

「おいギーシュ、お前は一体誰と付き合っているんだよ?」

「誰が恋人なんだ? ギーシュ」

魔法学院の制服を着た男子生徒たちが数人、席を並べていた。

中心で皆から質問を受けている、ギーシュと呼ばれた者は、フリルつきで趣味の悪い、良く言えば奇抜な、制服もどきに身を包んでいる。

ちなみにプリミランはガセビアである。

「付き合う? 僕にそのような特定の女性はいないさ。薔薇は、多くの女性を楽しませるためにあるのだからね」

そう口にして薔薇を口にするギーシュ。

彼の名は、ギーシュ・ド・グラモン。グラモン家の四男である。

グラモン家は代々続く軍人の家系であり、彼もその血を色濃く引き継いでいる。

さらにグラモン家は、代々続く女好きの家系でもある。それは血を色濃く引き継いでいる彼もまた然り。

見れば顔立ちはなかなか端整であり、遊びとして寄ってくる女性

なら多かったのだろう。

その自信が彼の性格を作り、ゾーマから浮気男としてターゲットにされる原因も作っていた。

「あ、あの……今ポケットから香水が落ちましたが……」

おずおずとギーシュに声をかけたのは、生徒たちの配膳をしていた、メイドの女の子だ。

彼女は、ギーシュのポケットから香水のビンが落ちるところを視認した。

平民である彼女にとって、貴族は近づきたくない、恐ろしい存在である。

ただ気に食わないという理由で、無礼打ちされた平民なんて、それこそ掃いて捨てるほどいる。

それが彼女を気後れさせた理由だが、だからと言って、貴族を無視するなんて選択肢もない。

落とし物を届けるだけで機嫌を損ねることもないだろうと、彼女は躊躇いがちにだが声をかけたのだ。

「ん？ 何を言ってるんだね君？ これは僕のじゃない」

ギーシュから返ってきた言葉は、彼女の意図しないものであった。

彼女は「でも……」と続けようとしたが、他の男子生徒によって、その言葉は遮られた。

「おい、これはモンモランシーが自分のために作っている香水じゃないか！

「ギーシュ！ 君はモンモランシーと付き合っているんだな？」

友人に囁し立てられ、しどろもどろになるギーシュ。

そんな男子生徒たちが大いに盛り上がっている場所に、栗色の髪をした可愛い女の子が近づいてくる。

瞳は綺麗なアメジスト色をしているのだが、今は寂寥を湛えていた。

「ギーシュ様……！」

「ケ、ケティ？ 彼らは誤解してるのさ。いいかい、僕の心に住んでいるのは、君だけ……」

「その香水があなたのポケットから出てきたのが、何よりの証拠ですわ！」

快音がホールに響く。

「さようならっ!」

ケティと呼ばれた少女は、ギーシュの頬を叩いたあと外へと走り去っていった。

水を打ったような静けさがあたりを包む。

痛む右頬をさすりながら平静を繕おうとするギーシュだが、不運なことは重なるものである。

そんな彼の元に、金髪を縦ロールにした、いかにもお嬢さま然とした少女が近づいてきた。

「ギーシュ、ちょっといいかしら」

その声にぎよつとして振り向くギーシュ。

「モンモランシー……。誤解だ。彼女とはただ一緒に、ラ・ロシェールの森へ遠乗りをしただけで……」

「やっぱり、あの一年生に、手を出していたのね?」

「お願いだよ『香水』のモンモランシー。君の咲き誇る薔薇のような顔を、そのような怒りでゆがませないでくれよ。僕まで悲しくな

るじゃないか」

モンモランシーが、その言葉ににっこりと微笑んだ。
その表情を見て「説得が成功した」と、ほっと安堵するギーシュ。
しかし、笑みを浮かべたままの彼女は、その表情のままウィング
ラスを手に掴み、中身をギーシュの顔へと浴びせた。

「うそつき！」

モンモランシーは怒鳴り、ケティと同じく、外へと駆けていった。

しばし茫然としていたギーシュだったが、自分が様々な視線を集
めていることに気付く。
特に先ほどから、隣で黙然としている友人たちには、精一杯の虚
勢を張らなくてはいけない。

「どうやらあのレディたちは、薔薇の意味を理解していないようだ」

ギーシュはハンカチを取り出し、滴るワインを拭きながら、そう
囁いた。

「た、大変です。なにか拭く物を持ってきます」

声をあげたのは、ギーシュに香水のビンを渡そうとした、メイドの少女だ。

彼女は、急に始まった騒動にしばし放心していたが、給仕の仕事を思い出してはつとしたのだ。

貴族様を濡れさせたままにしておくわけにいかない。

そう思い、彼女はその場を後にしようとしたのだが、なぜかギーシュに呼び止められた。

「まちたまえ」

「は、はい！」

何か粗相でもあったのだろうか。

慌てて立ち止まり、ギーシュの二の句を待った。

「君の軽率な行動のせいで、二人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

彼女の頭の中は、もう真っ白である。

平民でしかないただのメイドに、貴族様は責任を取れと言う。

もしかしたら無礼打ちにされるのかもしれない。

最悪の想像が払拭できず、彼女はただただ「申し訳ありません！申し訳ありません！」と繰り返した。

「いいかい？ 僕は君が香水のビンを見せたとき、知らないフリをしたじゃないか。話を合わせるぐらいの機転があってもいいだろう？」

「それは……」

一見、平民に八つ当たりしている貴族にしか見えないが、実はギ―シュもこの状況に弱り果てていた。

どう責任を転嫁しようと考えた矢先に、ビンを持ってきた人物に目をつけたものの、相手は年若い女の子である。

誰か助けて！

奇しくもギ―シュと女の子の意見が一致したとき、その声は響いた。

「シエスタよ、わしが変わってやろう」

その場にいた全員の視線が、声の主に向けられた。そこにはゾーマが、猫背になって立っていた。

「君は……たしか、ミス・ルイズの使い魔だったね？ 君には関係のない話だよ」

「そこな彼女、シエスタには恩があつてな。そこでこのわしが、貴様の相手をしてやろうと言うのだ。二股をしたあげく、八つ当たりをする貴様のな」

その言葉に反応したのは、今まで押し黙っていたギーシュの友人たちだ。

「そのとおりだ、ギーシュ！ お前が悪い！」

「二股なんてするからだ！」

図星を指され、ギーシュがその顔を怒りに染める。

「貴族に対してそんな態度を取ったらどうなるのか、わかって言ってるのかい？」

「うむ、つまり決闘であろう？」

「そんなところだけ物分りが良いじゃないか。しかし、アルヴィーズの食堂を使い魔の血で汚すわけにもいかないな……」

「ヴェストリの広場でよいな？」

「異論はない。『ゼロ』のルイズのかわりに、僕が礼儀を教えてやる！」

何人かの生徒を連れ立って、食堂から出て行くギーシュ。

他の生徒たちが、ヴェストリの広場へ見学に行こうと散っていく中、先ほどの少女がゾーマに声をかけた。

「あ、あの、ありがとうございます。でも、恩なんて……それに、わたしの名前も、教えてないのに……」

初対面で人外の魔物に、どうすれば恩をきせられるのだろうか。

だが、シエスタはゾーマのことを知らないが、ゾーマにとってシエスタはとても身近な存在なのである。

ゾーマ城にいたところのゾーマは、毎日小説を読んでシエスタに出会い、毎日アニメを見てシエスタに出会い、毎日シエスタの笑顔に癒されていた。

これを恩と言わずになんと言うのであろうか。

「シエスタよ。知らなければこれから知ればよい。わしは大魔王ゾーマ。闇の世界を支配する、大魔王ゾーマじゃ」

かっこいい言葉だが、実は答えになっていなかった。

第05話 ……どうしよう

「……………どうしよう」

ゾーマが、ギーシュと決闘の約束をしていた頃、タバサは一人の少女を追っていた。

ギーシュの頬を叩き、その足でヴェストリの広場とは反対側の広場に駆けていった少女を。

ゾーマから言い付かった内容が頭を過ぎる。

『栗色の髪をしている、ケティという一年生を決闘の場に連れてくるのだ』

果たしてその事件は起こり、タバサの目の前では、木に寄りかかって泣いているケティがいた。

声を掛けようとしたタバサであったが、ここで予期せぬ難関に気付く。

どうやって話しかけよう……。

過去ゆえに、タバサは自分から対人関係を持つとしたことがなかった。

親友が一人いるのだが、その親友とも、深いところでは関わったことがない。

タバサは、口下手なのだ。

大丈夫、北花壇警護騎士団の任務と同じ……大丈夫、これは説得任務。上手くやれる。

そう自分に言い聞かせると、意を決して声を掛けた。

「……決闘」

「ひつく……へ？ え！ だ、だれ！？」

ケティの心臓が早鐘のように鳴り響いた。

耳元で急に『決闘』などと囁かれて、驚かない人などいるのだろうか。

今の今まで咽び泣いていたケティであったが、その絶え間なく流れていた涙が、嘘のように止まっていた。

「……タバサ。二学年」

「先輩、でしたか……あ、こんな状態ですみません」

ケティが、涙でくちゃくちゃになった顔を、整えながら返答する。

「あの……それでわたしに、何かご用ですか？」

相手の反応を見て、タバサは一つ学習した。

泣いている相手には、まず落ち着かせてから要件を伝えないと聞きいれてもらえない、ということ。

今なら本題に入っても伝わりそう、とタバサは考えた。まずは決闘があることを、伝えなければいけない。

「……決闘」

「け、決闘！？ も、もしかして、先輩もその、ギーシュ様のことか……？」

「……ちがう。落ち着いて」

まだ彼女は落ち着いていなかった。なぜか勘違いされてしまう。もう少し彼女を落ち着かせないと。

そう判断したタバサは、次の作戦に入る。

相手に同調し、もう少し会話をしてから要件を伝える作戦だ。

「……心配」

まずはジャブ。相手の心を突き崩す。

「あ、心配してきてくれたんですね」

「……そう」

「ありがとうございます」

「……別に」

良い反応。

「ふふ、笑ってしまいますでしょ？」

「……ん？」

何が？

「ギーシュ様だったら『心の中にいるのは君だけだー』なんて言っ

「……うん」

「モンモランシー先輩と付き合ってたんですよ」

地雷踏んだ。

「……笑わない」

「そう言っていただけで助かります」

「……そう」

抜けた。

「ところで、タバサ様もその……」

「……ん？」

「わたしみたいに、こんな風に、思い悩むことってあるんですか？」

そう。

「………ある」

私には成すべき目的がある。

「そんなとき、どうします？」

「………仇討ち」

「まあ！ タバサ様って、けっこう過激なんですネ」

どうしても、成し遂げなければ。

「………そう」

「あははっ！」

「………」

終了しそう。

「………ふう」

「………」

「タバサ様って、不思議な方ですね」

そう、言われたのは初めて。

「……そう？」

「そうですよ。なぜか、なんでも話せそうな、そんな魅力に溢れていますもの」

「……そう」

悪い気はしない。

「聞いていただいて、ありがとうございました。おかげですつきりしましたわ」

「……そう」

なんとか予定通り、会話が成立したことに安堵するタバサ。

あとは彼女を決闘の場に連れて行くだけ。ここが好機と見計らったタバサは、一気に攻勢にでる。

「……決闘」

「そう、ですね……わかりましたわ。タバサ様」

ようやく伝わった。タバサの長い長い戦いが、実を結んだ瞬間であった。

「わかりました。わたし、ギーシュ様と決闘してきますわ!」

「……え、ちが」

「ほつぺたを叩いただけでは、気がすみませんものねっ!」

この流れはおかしい。

「……落ち着いて」

「ギーシュ様がどこにいらっしゃるか、わかりますか?」

困った。

「……ヴェストリの、広場」

「ありがとうございます! この『燐火』のケティ。この想いの仇討ちとして、胸を焦がした回数だけ、ギーシュ様を焦がしてきますわ!」

「……そう」

すっかり立ち直ったケティは、その足も軽くヴェストリの広場へと向かっていった。

「……どうしよう」

ケティに、決闘するよう勧めてしまったタバサ。

タバサはこの結果について、しばし考量していたが、考えても仕方ないと結論付けた。

連れて行くことはできた。やるべきことも果たした。ケセラセラ。あとはゾーマがなんとかしてくれるだろう。

トリスティン魔法学院の一室。学院長室。

そこでは、学院長であるオスマンに、コルベールが授業の経過報告を行っていた。

学院で最も偉い人物、オールド・オスマン学院長。

白銀に染まった長い髪、混じりけのない白さを持つ長い髭を蓄えた、好々爺然とした老人である。

よくイメージされる、熟練の老魔法使いといった雰囲気だ。

しかし一部で、彼は三百年も生きていると噂されるなど、その生態は謎に包まれていた。

「大変です！ オールド・オスマン！」

学院長室にドアが激しくノックされる。

「入りたまえ」

言われて入室してきたのは、メガネをかけた、秘書のようなイメー
ジを人に抱かせる、妙齡の女性だ。

流れるようなエメラルドグリーンの髪に、人を魅了するプロポーション。美女と形容するのが相応しいかもしれない。

「して、ミス・ロングビル。一体何があつたのじゃ騒々しい」

オスマンに促され、ロングビルが案件を伝える。

「はい、現在ヴェストリの広場で、決闘騒ぎが起こっています。生徒たちに邪魔されて、教師でも止められない状況です」

「まったく、暇をもてあました貴族ほど、性質の悪い生き物はおらんわい。して、誰が暴れておるのかね？」

「一人は、ギーシュ・ド・グラモンです」

その答えに、オスマンが肩を落とした。

「あの、グラモンのとこのバカ息子か。オヤジも色の道では剛の者じゃったが、息子も輪をかけて女好きじゃ。大方、女の子の取り合いじゃろ。相手は誰じゃ？」

「……それが、メイジではありません」
「とすると平民か？」

オスマンの目がすつと細められた。

学院長オールド・オスマンは人格者である。
少なくともこの学院内では、貴族の都合だけで平民を傷つけることを許してはいない。

「いえ、ミス・ヴァリエールの使い魔のようです。教師たちは、決闘を止めるために『眠りの鐘』の使用許可を求めています」

これにはオスマンも困り果てる。
生徒や平民ならまだしも、先ごろ召喚されたところの使い魔など、いかに偉大なオスマンと言えど、把握していないのだ。

「ふむ、してゴルベークくん。その、ミス・ヴァリエールの使い魔とは、どういうものじゃね？」
「コルベールですオールド・オスマン。そうですね、自分で大魔王などと広言を吐いてましたが……ネズミより弱いかと思います」

自分の名前を訂正したコルベールは、先日行われた召喚の儀を思い出しながら答えた。

コルベールの目の前では、例にあげられたオスマンの使い魔が、

チューチュー文句を言っている。

「わしのモートソグニルよりとな？」

名前をわざと間違えた腹いせを、間接的に受けたオスマンが、恨みがましい目をコルベールへ向けながら聞き直す。

「はい、使い魔のルーンを刻まれているとき、痛みのアマリの打ち回っていましたから」

「それはなんとも……」

ルーンを刻まれて痛がる使い魔など、オスマンが教鞭をとっていたところにも見たことがない。

これは前代未聞に貧弱な使い魔なのであろう。

「して、ミス・ヴァリエールは優秀なメイジなのかね？」

「いえ、それは……その」

「やはりの。しかし仮にも、公爵家の娘の使い魔じゃ。使い魔を殺されたとあれば、公爵家が黙ってはおるまい」

言いよどむコルベールを見て、オスマンは全てを把握した。

ルイズの魔法が爆発することについてまで、詳しくは知らないオスマンであるが、噂なら聞いたことがある。

『魔法を使っても失敗ばかりする公爵家令嬢がいる』と。

そんな彼女が、魔法を成功させ呼び出した使い魔が、彼女にとって可愛くないわけがない。

傍らにいるモートソグニルに目をやりながら、オスマンは決断する。

「たかが子どものケンカと思うておったが……しかたあるまい、眠りの鐘の使用を許可する」

学院長室に、オスマンの頼もしい言葉が響き渡った。

第06話 諸君！

「諸君！ 決闘だ！」

ギーシュが薔薇の造花を真上にあげ、皆に宣言した。

魔法学院の中庭に存する、ヴェストリの広場。
普段は閑散としているのだが、今では決闘を一目見ようとした観客に、埋め尽くされていた。

「とりあえず、逃げずに来たことは誉めようじゃないか」

薔薇を、ゾーマへと向けながら言う。

「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。よもや文句はあるまい？」
「文句はない……だが、少し待つがよい」

それを聞いて、ギーシュが鼻で笑う。
決闘開始を待てるゾーマの返事を、臆したと解釈したからだ。

「なんだい？ いまさら命乞いかい？」

ゾーマは、別に命乞いをしているわけではなかった。ゾーマが煮え切らないのには訳がある。

原作では決闘を見ていなかったケティだが、その後、強さを見せる男子にケティは心寄せていた。

つまり、ケティが見ている前でギーシュを倒せば、全てを前倒しにして、ケティが自分に夢中になってくれるのではないか。そんな邪なことを画策していたのだ。

「来ないなら、こちらから行かせてもらおう」

ゾーマが怖気づいたと踏んだギーシュが、先ほどから携えていた薔薇を振るう。

振るった薔薇から、一枚の花びらが舞った。

花びらが地面に落ちると、なんとそこには、甲冑を着た女戦士の、2メートルほどのゴーレムが現れたのだ。

「僕の二つ名は『青銅』。青銅のギーシュだ。従って、青銅のゴーレム『ワルキューレ』がお相手するよ」

ギーシュの声を合図に、ワルキューレがゾーマへと向かって突き進む。

だが、そんな状況にもかかわらず、ゾーマは微動だにしていなかった。

「どうやら、逃げることもできないようだね！」

青銅とは思えない速度で距離を縮めたワルキューレが、拳を構えた。

「僕のワルキューレの攻撃は痛いよ！ ルーンを刻まれるよりね！」

金属を強かに打ちつけたような、重い音が鳴り響いた。

誰もがギーシュの勝利を確信していたのだが、何やら様子がおかしい。

見ると、ワルキューレの腕が在らぬ方向に曲がっていた。

「……い、一体。何をしたんだね……？」

ギーシュの疑問も、もつともである。

少なくとも、召喚の儀に立ち会った生徒なら、ワルキューレの攻撃を受け、無様に倒れ伏しているゾーマを予想していたのだから。

「なにもしておらん」

ゾーマから返ってきた言葉は、ギーシュに驚愕をもたせた。

「わしが立っているところに、人形がぶつかって、勝手に拉げただけのこと」

さもつまらんと言いつつゾーマに、ギーシュが激昂した。

「馬鹿な……。いや、目には見えないが、何かをしている！ そうに違いない！」

ギーシュが薔薇を模した杖を振るう。

杖についていた花びらのうち、残り六枚が地面に落ちた。

「これが僕の全力だ！ 例え何をしようとも！ 七体のワルキューレからの攻撃は防げまい！」

「だから、待てと……」

ギーシュの前に、それぞれ剣や槍などを持った、六体のワルキューレが現れた。

そこに先ほどのワルキューレも合流する。

人より大きなゴーレムが七体。それらが陣形をとる様は、見るものを圧巻させた。

だが、闇の衣を展開しているゾーマにとって、例えそれが千体のワルキューレでも大差はない。
壊れる人形の数が増えるだけなのである。

まだギーシュに心折られては困る。さてどうしたものか。そうゾーマが考えていたときだ。

「……ゾーマ」

不意に、ゾーマに声をかける者がいた。

だが、その者の姿はどこにも見えない。
風の魔法を使い、声だけを届けているようだ。

「よくぞ戻った、タバサよ。首尾はどうだ？」
「……来てる」

ゾーマが、破顔する。

「ギーシュよ、そろそろわしの力を見せようではないか」

「どう足掻こうと、七体のワルキューレの目はごまかせないさ！
行け！　ワルキューレたち！」

ギーシュが、ワルキューレを器用に操り、進撃させる。

ゾーマは、先ほどと同じように、その場からは動いていない。
しかしその手は、ワルキューレたちが来る方へと向けられていた。

「いてつくはどう！」

”ゾーマの　ゆびさきから　いてつくはどうが　ほとばしる！”

ゾーマを目前にして、ワルキューレたちがその猛進を止めた。

”いてつくはどう”とは、対象の魔法効果を全て打ち消す、ゾーマを語る上で欠かせない必殺技だ。

魔法効果の打ち消しは人に限らず、魔法で作られたワルキューレとて、例外ではなかった。

もうワルキューレであった物は、ゴーレムとして機能していない。
間もなく、土くれと化することだろう。

「わっはっは！ ギーシュよ！ わが野望の生贄となれい！」

ゾーマが天高く手をかざした、まさにそのとき。

ゴーン……ゴーン……。

ふいに、優しい鐘の音が響き渡った。

ゴーン……ゴーン……。

それはゾーマのみならず、ギーシュにも届く。

ゴーン……ゴーン……。

その音色は、ヴェストリの広場にいる、全ての生物の耳に訪れた。

「やりましたな！ オールド・オスマン！」
「ああ、まったくヒヤヒヤしたわい」

トリスティン魔法学院、学院長室。
そこでは、『姿見の鏡』で決闘の様子を見ていたオスマンとコル
ベルが、決闘を無事止められたことに胸を撫で下ろしていた。

「ふう、わしが秘法『眠りの鐘』を使うよう、指示を出さんかった
らどうなっておったか」

オスマンたちは、ゾーマがワルキューレに攻撃されたところを見
ていなかった。

眠りの鐘の使用許可を出した後、姿見の鏡を取り出したオスマンたちが見たものとは。

すでに七体のワルキューレに囲まれ、絶体絶命のゾーマの姿であったのだ。

「ははあ。学院長の深謀には、恐れ入ります」

「ほっほ。褒めてもなんも出んぞ。ミスタ・えと、なんとか」

「コルベールです。では私が広場の生徒たちを、魔法で部屋に帰しておきますよ」

学院長室は、和やかなムードに包まれていた。

次の日の朝。

気が付けば、ゾーマの巨体は、広場の芝生の上に倒れていた。

そこには、後一步で実現するはずだった、ケティからの熱い視線はなかった。

ヴェストリの広場で、たった独り。

ゾーマは周りを見渡し、状況を理解して、泣いた。

第06話 諸君！（後書き）

大魔王は、『ひかりのたま』や『眠りの鐘』などの『秘法』系に弱い。多分。

第07話 ……ゾーマ

「……ゾーマ」

ヴェストリの広場でさめざめと泣いていたゾーマに、背後から話しかけてくる者がいた。

「……約束」

ゾーマは、力を示せず、計画が失敗したことに大魔王泣きしていた。

しかし再度かけられたその言葉に、はっと気を取り直す。
少女に、大魔王泣きに泣いているところなど、見せるわけにはいかない。

体裁を繕い、咳払いをしてから声の主へと向き直る。

「うむ、そうであったなタバサよ。どれ、ルイズにしばらく家を空けると伝えねばの」

ゾーマとタバサの体がフワリと浮かび、学院の方へ向けて飛んでいった。

場所はトリステイン魔法学院、女子寮の一室。
その部屋の主は、まだすやすやと眠っている。

彼女のそんな平和な朝は、不躰な闖入者によって阻まれることになる。

「……起きて」

「うっーん、実質1時間しか寝てないのよー」

部屋の主は嘘をついた。

彼女はなんとかして、この実りある時間を延ばしたかったのだ。

「……嘘、夕食前から寝てた。起きて」

やっとのことで上体を起こし、彼女は寝ぼけ眼で周りを見渡した。
目の前には、自分より幼そうな、青色の髪をした少女が立っていた。

「ふぁー……えと、あんたは確か……タバサ……？」

「……そう」

「えっ？ なななんだって勝手にわたしの部屋にいるのよ！」

ぼんやりとした彼女の意識が、驚きによって少し覚醒する。

目の前にいるのは、同級生のタバサだ。彼女はタバサと、一度も会話したことがない。

そんな接点のない人物が、友達でもないのに、寝ている間に、勝手に部屋へと侵入してきている。

「……窓」

質問には答えず、窓を指差すタバサ。

「窓？ もー、なんなのよー」

寝起きで機嫌が悪いところに、会話の成立しないことへの苛立ちが加わる。

窓際まで移動し、こちらに来说わんばかりのタバサ。

彼女は欠伸をかみ締めながら、言われるがままタバサの隣へと立った。

窓の外へと目をやると、そこには邪悪な、3メートルほどの何かが
”浮かんで”いた。

「やっと目が覚めたか。ルイズよ」

「ひっ……ああんた誰!？」

こんな不気味な生物、見たことがない。
ルイズが、寝起きで回らない頭を捻る。

「えっと……ああ!」

目の前の存在を、上から下まで確認したルイズは、ようやくそれ
に思い至る。

「……わたしの、使い魔、だったわね」

気落ちしつつも思い出した。これは貧弱で、脆弱な使い大魔王だ
った。

「で？ ご主人様をこんな朝早くから起こして、一体何の用よ？」

実はそろそろ準備をしないと、朝食に間に合わない時間なのだが、ルイズの時間感覚はちょっと変になっていた。

召喚初日の午後に、ルーラで次の日の朝、つまり昨日の朝を迎え、根が真面目なルイズはそのまま起きて続けて授業を受けたのだ。

昨日の夕食前に寝たとはいえ、昨日が眠かった分、まだまだ寝足りない。

ルイズの体内時計では、今はまだ早朝であつた。

「なに、五日ほどルイズの傍を離れることになつてな」
「へっ！　じゃあ使い魔の役目はどうするのよ！」

ゾーマの無責任な言動に、ルイズがカミナリを落とす。
と言つても、今まで使い魔らしい仕事をしたことがないのだが。

「心配はいらん」

カミナリなど意に介さずと、ゾーマが続きを語る。

「三日後の朝になるが、この部屋にいるがよい。代わりの使い魔を
ご覧にいれよう」
「うっ……」

突然のこの申し出は、ルイズにとって非常に魅力的であった。

理由として、ここ数日で使い魔が必要になることなど、まず起き
ないことがあげられる。

それよりは、今よりマシな使い魔にランクアップしてくれるほう
が良い。

教室にも連れて行けない、いるかいないかわからない使い魔より
は、よっぽど良いだろうと考えた。

「し、仕方ないわね。ちゃんと三日後には、凄^{すご}い使い魔を用意でき
るんでしょうね？」

「無論だ。では暫しの別れだ。ルイズよ」

傍目から見てもわかるほど、機嫌がよくなったルイズに別れを告
げると、ゾーマは『ルーラ』を唱え、空へと、次元の間へと飛んで
いった。

タバサを伴って。

「へー、タバサって子と”ぱーていー”組んでたのね……」

消え行く二人を見送ったルイズが、ぽつりと呟いた。

「ふーん。女が出来たから旅行に行こうって考えね……」

先ほどまでの機嫌はどこへやら。ルイズに、沸々と怒りが込み上げてくる。

もしかしたらわたしはお邪魔で、体よくあしらわれたのかもしれない。

「わたしをほったらかして、女の子とお出かけね……」

何より許せないのが、主よりも他の、しかも女を優先したことが許せない。

いらない使い魔とはいえ、自分の物なのに。

「じ、じじじ……」

空気を圧縮すれば爆発が起るように、ルイズもまた、怒りを圧

縮していた。

「……ここっ、この！ エロ大魔王——！！」

中庭で平和を謳歌していた小鳥たちが、慌しく羽ばたいていった。

第08話 タバサよ

「タバサよ。到着したぞ」

タバサは、目の前に映る門に、我が目を疑っていた。

門には紋章が画かれている。

紋章は、間違いなくここが、ガリア王家であることを指していた。

その紋章には現在、大きなバツ印が上から刻まれている。”不名誉印”である。

王族でありながら、王権を剥奪されている。この印には、そんな意味が込められていた。

ここは、タバサの実家、オルレアン家なのだ。

遠くでも一瞬で着ける。

その意味を理解していることと、実際に体験することは違う。

”ルーラ”によって実家に到着したタバサは、ゾーマのあまりにも規格外な魔法に、文字どおり言葉を失っていた。

そこへ、一人の老執事が近づいてくる。
彼はゾーマを一目見遣ったあと、タバサへ向き直り、恭しく頭を下げた。

「お嬢さま、お帰りなさいませ……その、こちらは……？」

老執事がゾーマについて尋ねる。

「……使い魔」

「なんと、使い魔で御座いましたか」

トリステイン魔法学院には、使い魔を召喚する授業があると聞く。
この使い魔はお嬢様と呼び出し、これからお嬢様を支えてくれる
大事な使い魔なのだろう。

老執事は、そう解釈した。

「しかし、立派な使い魔でございますな」

「ペルスランよ、無駄話はよい。ここは諜報の気配がする。中で話
そうではないか」

「おや、使い魔様は、お嬢様からわたくしの名を聞いておられたの
ですか」

案内を頼むゾーマに、ペルスランと名前を呼ばれた老執事は、さして疑問に思うこともなく返答した。

ペルスランの道案内により、一行は立派な扉の前へと到着する。

「ではこちらへ」

屋敷の扉を開けたペルスランが、中へ入るよう促した。

扉の先にある渡り廊下は、王権を失ったとはいえ、さすが元王族の屋敷と言えた。

その廊下は調度品で彩られ、3メートルの身長を持つゾーマでも悠々と歩けるほど、大きな作りになっていたのだ。

「ペルスランよ。そちらは客間のある方ではないか？」

「はい、そのとおりで御座いますが……」

先導しているペルスランに、ゾーマが声をかけた。

『公式設定資料集』で間取りを把握していた、ゾーマならではの発言である。

「タバサの、いや、シャルロットの母の部屋へと案内してもらいたい」

「はっ……いえ、それは、しかし……」

ゾーマの正面切った物言いに、ペルスランが言いよどむ。

「……構わない」

「お嬢様がそう仰られるのでしたら……畏まりました」

タバサ、本名をシャルロット・エレーヌ・オルレアン。

彼女の母は、薬の毒によって心を壊されていた。

それは、本来であれば、あまり人に見せられるものではないのだが、実の娘が構わないと言う。

何か考えがあるのかもしれない。

ペルスランはそう考え、行き先を彼女の母、オルレアン公夫人の部屋へと変更した。

「奥様、失礼します」

タバサとゾーマの二人は、ペルスランの案内で、屋敷の一番奥の

部屋へと辿り着いた。

ペルスランが部屋の中へ呼びかけ、ノックを試みるも中からの返事はない。

「では、どうぞ」

返事がないのはいつものこと。それはタバサも、なぜかゾーマも理解していたので話がはやかっただ。

扉を開けたペルスランが、二人を中へと誘導する。

中は、ベッドと椅子、テーブルといった、最低限の家具しかない、うら寂しい部屋であった。

「だ、誰です？」

怯えたような声色が、ベッドから発せられた。

声のするほうへと目を遣れば、人形を守るように抱きかかえた、やつれた表情の女性がいる。

ガリア王家の証である青髪を、手入れすることもなく伸ばしに伸ばした彼女は、三十代半ばであるにも関わらず、二十ほど老けて見えた。

彼女は、上体のみを起こした姿勢で、突然の来客たちに、いぶかしむ目を向けている。

「……ただいま帰りました。かあさま」

タバサが、寝台の少し手前で膝を折り、母に帰省を告げる。
久々の親子の対面なのであるが、母が娘へ向ける態度は、世間一般のそれとは違っていた。

「下がりなさい、無礼者！」

唐突に激高した彼女が、タバサに対して、敵意をあらわにする。

「王家の回し者ね？ わたしから、シャルロットを奪おうというのね？ 誰があなた方に、可愛いシャルロットを渡すものですか！」

彼女が、病身の女性とは思えないほどの叫喚をあげた。

手に持っている人形を、守るようにかき抱く母を見て、タバサが複雑な表情をする。

タバサは一度唇を噛み締め、震える声でゾーマに問う。

「……治る？」

縫るようにつめるタバサに、ゾーマが宣言した。

「造作もない」

その言葉にタバサは驚きを、喜びを隠せなかった。

今までどんなに薬を持ってきても、水系統の魔法を試しても、かあさまの毒は消せなかったからだ。

ここに来る前、タバサは考えていた。

見てないからこそ、ゾーマは治すのに協力するなどと言うのではと。

見れば多分、匙を投げるに違いないと。

でも、それでも良い。

もし無理でも、安全な場所にかあさまを、ルーラで連れてってくれるだけで良かった。

しかしこの大魔王は、かあさまを見てなお、自信に満ち溢れた顔をしている。

「所詮毒であろう。例えそれが猛毒であっても治す”じゅもん”を、わしは知っておる」

「……お願い。はやく……！」

切迫した表情を見せるタバサ。

オルレアン公夫人に向き直ったゾーマは、目を閉じ、瞑想する。
ゾーマの掌に、可視できるほどの量の魔力が、渦を巻いて集ま
ていく。

ゾーマはその両手を、タバサの母へと向けた。
そして、解毒の効果を持つ”じゅもん”を唱え、魔力を解き放
つたのだ。

「キアリー！」

詠唱を受け、ゾーマの掌に集まっていた、魔力の奔流が弾けた。
飛散した無数の、薄い青色をした発光体は、タバサの母へ向かっ

て降り注がれていった。

その幻想的な光景に、タバサは声を出すのも忘れ、魅入っていた。

「シャルロットよ。これで母は、無事治ったはずじゃ」

ゾーマの言葉に、タバサがハッとわれに返った。

慌ててベッドに目を遣ると、放心状態の母の姿が見える。

「……本当に？」

ゾーマを責めているわけではなく、確かめる術がない故の問いかけだ。

まだかあさまの意識が、はっきりしていないのだろうか。

「疑り深いの。見ておれ」

タバサの視線を曲解したゾーマは、行動を起こすことにした。
ルイズに散々嫌疑の目を向けられたゾーマは、若干被害妄想にな
っているのかもしれない。

「オルレアン公夫人よ」

その呼び掛けに、オルレアン公夫人はビクツと反応した。

「だ、誰です？」

怯えたような声色が、ベッドから発せられた。
彼女は、上体のみを起こした姿勢で、目の前の異形に、いぶかし
む目を向けている。

「わしは、大魔王ゾーマじゃ」

「さ、下がちなさい、無礼者！」

唐突に激高した彼女が、ゾーマに対して、敵意をあらわにする。

「王家の回し者ね？ わたしから、シャルロットを奪おうというのね？ 誰があなた方に、可愛いシャルロットを渡すものですか！」

彼女が、病身の女性とは思えないほどの叫喚をあげた。

タバサはその様子を見て、猜疑心をあらわにした目をゾーマへ向けた。

その目はまるで『本当に治っているの？』と語っているようだ。

しかし、ベッドで横になっていたオルレアン公夫人は、立ち上がり、タバサに向けてその手を伸ばし、抱きしめた。

「ああ、可愛いシャルロット……あなたは、絶対に渡さないわ……。絶対に渡すものですか……！ 何があるうと、あなただけは私が守って見せる………」

「かあさま………」

呆然としていたタバサが、その手をおずおずと母へ伸ばし、抱きしめ返した。

その目には、涙を湛えていた。

今まで何をしても、どんなに努力しても得られなかった愛情。

それが今、自分に向けて注がれている。

「……かあさま……… かあさま、かあさま……… かあさまあ！」

タバサは、ただただ母の名を呼び、その温もりに縋った。

母の背へと回していた手に、ギュッと力を込めて。

第09巻 みなさん

「みなさん、お集まりのようですね」

ゾーマ城一階、会議室。

そこには、大魔王軍の中枢を担う、五名の姿があった。

一名は先ほどから皆に語りかける魔物。

大魔王軍参謀、アークマージだ。

「ただいまより、ゾーマ様失踪事件の犯人を解き明かしましょう」

アークマージの格好は、紫の法衣を頭から被り、薄青色の腰布を巻いただけのシンプルなものだ。

目のみを開けた風采からは、その表情が窺えない。

彼の、まるで湖面のような眼が、怪しげに光り輝いた。

「だ、誰なんですか！ ゾーマ様の行方を不明にさせた者は！」

「ゾーマ様は、生きておられるのですか！」

質問で声を荒げたのは、10メートルはあろうかという石像たちだ。

彼らは”だいまじん”という種族で、喋り、動くことの出来る体を持っている。

大魔王ゾーマを守護する、門番なのだ。

「失踪の謎がわかったというのか……？ アークマージ……」

3メートルといった体躯ながら、”だいまじん”より壮大で、重々しい存在がアークマージを問い質した。

かの者は、草原を思わせる緑の法衣に、内は赤、外側は紫の、リバーシブルなマントを羽織っている。

品の良い丸型の、ルビーのネックレスを装着し、指は三又に別れ、頭上には鬼のような角が生えていた。

そしてその顔は、カバを想起させた。

「謎などありませんよ、バラモス様。あるのは論理的な解決のみです」

カバに、容易であると告げるアークマージ。

そう、このカバこそ、ゾーマ軍において二番目の地位を持つ苦勞魔物、魔王バラモスなのだ。

「さて、僕のプロファイリングによりますと、犯人は魔物、もしくははにんげんであると言えるでしょう」
「待て……」

アークマージに待ったをかけるバラモス。
魔物、もしくははにんげんなど、あまりにも範囲が広すぎる。

「何です？ バラモス様は、それ以外の生物の可能性を示唆しますか？」

「いや……そういうわけじゃないが……」

「では、それ以外の生物の可能性も考慮しましょう」

さらに漠然としてしまう人物像。

「次に性別ですが、これは男性、もしくは女性の犯行であると思われます」
「待て……」

「またも待ったをかけるバラモス。
バラモスの頭上では「その可能性があったか！」などと」だいま
じん” たちが口々に言う。

「今度は何です？ まさかバラモス様は、オカマの可能性もあると
お言いになりますか？」

「いや……なんというか……」

「大丈夫です。オカマは男性に含まれますから」

「おおー！」と”だいまじん” たちの拍手喝采が起こった。

本当にこの大魔王軍は大丈夫なのであるかと、バラモスは嘆息
しながらに思った。

バラモスが苦勞魔王と呼ばれる、所以の一つである。

「続いて身長ですが、そうですね。1メートル代から5メートル代
もしくは、6メートル代から10メートル代でほぼ間違いないでし
ょう」

もはや指摘をする気力も失せた、バラモスであった。

「僕は思いました。これら条件を満たす者とは、一体何者であるの
か、とね」

バラモスが心の中で呟く。『全ての生命じゃないの』と。

「そう……犯人は……僕のカンでは……」

バラモスが心の中で呟く。『推理どこ行ったの』と。

「ゾーマ様はどうやら……異世界の少女に召還されただけですね。心配はいらないでしょう」

「なんだって！」

「なんだって！」

「なんじゃと……！」

”だいまじん”たちが、バラモスが揃って驚嘆の声をあげた。

「なあに、簡単な事ですよ。論理的帰結です」

まるで名探偵のような口調で話しを続けるアークマージ。

「僕が言ったプロファイリングに……」

アークマージが事件の真相を語ろうとした、その時であった。

「ほう、なにやら面白そうな話ではないか」

偉大で、尊大で、莊嚴なる声が、会議室に響き渡る。

「これはこれはゾーマ様、お早いお帰りで」

いち早く反応したのはアークマージだ。

「ゾ、ゾーマ様……！ どこに行っておられたのですか……！」

バラモスが安心をあらわにして、それに続いた。

「バラモスに、アークマージよ。わしが居らぬ間、ご苦労であった」

二魔物に、労いの言葉をかけるゾーマ。

”だいまじん”は一步引いたところで、まるで石のように直立して、喜びを噛みしめていた。

「僕の推理では、ゾーマ様はもう少し異世界に留まるもの、と推測していたのですが」

「うむ、理由が出来てな。入るがよい」

かくしてゾーマによって会議室へと入ってきたのは、うら若き少女と壮齡の女性、年老いた執事の三名であった。

「ゾーマ様……これはいったい……？」

バラモスが疑問をぶつけた。

先ほどからアークマージが「はあ、なるほど！」などと言っているが、バラモスには全く理解が出来なかったのだ。

「わしは、またしばらく城をあける。そしてバラモス。それには貴様にも同行してもらおう」

「はあ……」

疑問は晴れないが、察するに、厄介ごとを頼まれるらしい、とバラモスは悟る。

「アークマージよ」

「はい、かしこまりました」

「女、オルレアン公夫人と、その執事ペルスラン。両名を我が城で

「丁重にもてなすよう、手配しておけ」

一体どこに連れて行かれるというのか。

バラモスの悩みの種が、また一つ増えた瞬間であった。

「……諜報部隊によれば、オルレ안의屋敷に、『何者か』を伴ったシャルロットが唐突に現れ」

豪奢な作りの一室。ほの暗い室内で、一人チェスに興じながら語る男性。

「その後すぐに屋敷を確認したものの、すでもぬけの殻であったと」

彼は、青色の髪に青色の顎鬚と、ガリア王族の特徴を備えていた。

「そう、言っただな？ 余の可愛いミューズよ」

部屋の陰から、ミューズと呼ばれた人物が姿を現した。

ミューズは、顔の部分のみ露出した外套に身を包んでいる。

室内の暗さから、その顔には影が差し、面相は窺い知れなかった。

「はい。謎の者がなんらかの手段を用い、軟禁状態のオルレアン公夫人ともども、逃走させたものと考えます」
「して、その者の調査は？」

彼は、チエスを続けながらミューズへと問う。

「諜報が風の魔法を使い、聞いたところによりますと、シャルロットの使い魔を名乗ったと」
「異な話だ……」

チエスの手を止めた男が、腕を組み、考えるような素振りを見せた。

「確か、余の姪は、風竜を呼び出したとの報告があったではないか」
「はい。つまり……」

ミューズが自分の考えを纏め、自らの主へと伝える。

「学園に、手引きをしたものがいるのでしょうか」

「なるほど。友人に素性を明かし、逃走の手助けができる使い魔を、派遣してもらった。確かに辻褄があう」

一人チェスは、先ほどから少しも進んでいない。

「唐突に現れ、煙のように消え失せる使い魔、か……」

盤面から目を離れた彼は、ミューズへと向き直った。

「今すぐにでもこちらに攻めてくるやもしれんな。どう対処する？
余の可愛いミューズよ」

男が、愉しげな笑みを浮かべる。

その顔はまるで、面白い玩具を見つけた、少年のようだ。

「逃亡を許したとは言え、オルレアン公夫人の毒を治癒する薬は、
我らが手にあります。これではシャルロットも、こちらに手は出せ
ないでしょう」

「足りぬな……」

一転、大人のような表情で、彼は真剣に考えこんだ。

「屋敷へと姿を現したのは、その使い魔と、姪だけであつたな……」

そして、名案を思いついたのだろうか。

彼はその口角をあげ、ミューズへと指令を出した。

「謎の使い魔の主は魔法学院にいる。その者を探し当て、襲わせろ。主の危機に、こちらを攻めることも出来まい」

「はっ、かしこまりました！」

ミューズの去った部屋で独り、その男は、目を細めた。

「ふふ……ふははは！ どうでる！ 謎の使い魔よ！」

彼は、まるで狂人のように笑い、自分を脅かす宿敵の出現に、心震わすのであった。

第10話　へー

「へー、ゾーマが役に立つこともあるのね」

”ルーラ”によつて、次の日の朝、トリスティン魔法学院へと到着したゾーマとタバサ。あとカバ。

ルイズの自室へと移動した彼らを待ち受けていたのは、ルイズと赤髪の女性であつた。

質問責めにあつたタバサは、ここ数日の内容を素直に説明した。母が毒を飲まされ軟禁されていた。それを助けるために、ゾーマの能力を借りたと。

理由は、他人の使い魔を勝手に連れまわした負い目から。理由は、親友に対して説明していなかった負い目から。

「にしてもタバサ……。なんで親友のわたしに言ってくれなかったのよ」

窮屈になつてしまつたルイズの部屋で、先ほどからタバサに対して不満の声をあげているのは、赤髪の女性だ。

彼女はまるで炎のような髪を背中まで伸ばし、褐色の肌に抜群の

プロポーションと、大よそ男子の心を、鷲掴みにする容姿を備えていた。

そんな情熱的な彼女は、ゲルマニアの貴族で、名をキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー。

魔法学院があるここ、トリステイン王国の隣国にはゲルマニアという国が在る。

キュルケの炎髪は、ゲルマニアの公爵家、ツェルプストー家特有のものなのだ。

「……心配」

タバサは別に、親友のキュルケをぞんざいに扱ったつもりはない。復讐の渦中に、親友を巻き込みたくなかっただけなのである。

「ところでルイズよ。なぜキュルケが部屋におる。仲でも良くなつたのか？」

「まさかつ！」

ゾーマの言葉に、ルイズが鼻で笑った。

前著したように、キュルケはゲルマニア貴族だ。その領地は、ト

リスティンとの国境沿いに位置する。

ルイズのヴァリエール家は、トリステインの公爵家。ヴァリエール家もまた、ゲルマニアとの国境沿いに領地を持っていた。

これが何を意味するのかと言えば、戦争になれば真っ先にぶつかる、仇敵同士であることを指すのだ。

平時においても、恋人や婚約者を取り合ったりと、両家の争いは形態を変えて存在する。

代を経て行われたこの争いは、きっちりルイズに影響を与えていた。

「三日前にヴァリエールに聞いたのよ。今日タバサと一緒に、ここに帰ってくるはずだって」

反対にキュルケのほうはと言えば、過去のこととは過去のことと割り切っている様子である。

「そつよ思い出したわ！　ゾーマ！　あんた代わりの使い魔用意するって言ってたけど……」

そつえば、といった顔で、ルイズが声を張り上げる。

「……この、このこと！？」

ルイズの部屋を圧迫している原因の一つ、服を着たカバに、ルイズが指を向けた。

「うむ、バラモスと言う、わしのしもべじゃ。またしばらく傍を離れるのでな。こやつを使い魔王に置いておく」

「そういえば……初めに、五日ほど離れるって言ってたわね」

ルイズが三日前のことを思い出す。

ゾーマがタバサと一緒に”ルーラ”でどこかへ行ったときは、ムツとした。

その結果、今の今まで忘れていたわけだが、確かにゾーマは、代わりの使い魔を用意する変わりにもう少し家をあげると言っていた。

人には言い難い事情というものがある。タバサの件などまさにそれであろう。

トリステイン貴族としての嗜みを身につけていたルイズは、それ以上詮索するものかどうかと思い、納得を示した。

「仕方ないわね……」

嘆息気味にだが、了承するルイズであった。

「はっ……！」

大きな口をあぐりとあけ、見るでもなく周囲を眺めていたバラモス。

聞いたことのある名前、見たことのある顔ぶれ。

もしやと思ったバラモスは、先ほどから逡巡している疑問をゾーマにぶつけた。

「ゾーマ様……まさかここは……？」

「うむ、わしはついに、ディメンション・チェンジを果たしたのじや」

小声で囁かれた会話で、やっとバラモスにも理解できた。

ここは、『ゼロの使い魔』の世界なのだと。

にんげん文化としてゾーマに献上した品々は、バラモスが検閲していた。

のめり込みこそしなかったバラモスだが、大まかな話の流れ程度なら記憶している。

「それで……私はルイズ様の使い魔、ですか……？」

「ここに攻めてくる者があるやもしれぬ。わしがおらぬ間、貴様には女生徒全員の護衛をしてもらおう」

「……ちよつと、何ひそひそ話してるのよ？」

怪訝な顔をして尋ねてくるのはルイズだ。

バラモスにとっては、これからしばらくの間、ご主人様となる人である。

「これはこれはルイズ様……申し訳ありません……。使い魔の引継ぎをしていたものでして……」

「まあいいわ。これからよろしくね。カバ」

「カ……？ カカカババ……？ バババ……？」

魔王バラモスにとって、これほどの侮辱があるだろうか。

よりもよって、下等な種類のカバなどと同種に扱われるなど。

「本当に使い魔として大丈夫なのかしら……？ このカバ」

ルイズの二度目のカバ発言に、やり場のない怒りに、バラモスはあわや憤死するところであった。

場所は移り、浮遊大陸アルビオン。
時間も移り、前日の夜のこと。

「シェフィールド殿、お久しぶりにございます」

華美な装飾の目立つ一室。

部屋に居るのは、聖職者のような服を着た男と、シェフィールドと呼ばれた者。

「クロムウエルよ。首尾はどうだ？」

「実は……アルビオン攻めが難航しておりましてな」

上司に報告するように話す、聖職者然とした男の名は、どうやらクロムウエルというらしい。

彼は深緑の外套を羽織り、頭には丸型の、これまた聖職者が被るような帽子をつけている。

髪型さえまともであれば、彼は聖職者以外の何者にも見えなかっただろう。

彼はそのブロンドの髪を、奇抜にも横でカールさせていた。まるで古典派音楽家のような髪型である。

「そんなことよりクロムウエル。実はやってもらいたいことがある」

自分で聞いておきながら『そんなこと』と断じるシェフィールド。

クロムウエルは、“レコンキスタ”という反乱軍を使い、ハルケギニア転覆を企む首謀者、表向きはそう知られている。実際のところは、こうして指示を受けて行動する、操り人形なのであるが。

シェフィールドを使い、アルビオンを攻めるよう命令を受けたクロムウエルは、アルビオン国に対して戦争を仕掛けた。その戦線は熾烈を極め、戦況は佳境に入ってきたところなのである。

しかし彼女には、もっと重要な使命があったのだ。

ジョゼフより魔法学院を攻めるよう言い遣ったミューズは、一路、アルビオンへ向けて出発した。

そして、“マジックアイテムを操る能力”を持つ、彼女にしか出来ない移動手段によって、ほんの数刻の後にはアルビオンへと到着していた。

ジョゼフにミューズと言われて、他ではシェフィールドと名乗る。ではシェフィールドという名前が偽名かと言われると、別にそうではない。

彼女は、親愛なる主からのみ、神話の女神から名前を借り『ミューズ』と呼ばれていたのだ。

「手駒を使って、魔法学院を襲撃してもらいたい」
「な、なんですって!？」

これにはクロムウエルも、上申せざるを得なかった。

「あそこには貴族の師弟などがたくさんおりますぞ。まだアルビオンを攻めきれしていない現状でそんなことをすれば……」

アルビオンを制圧していない今、悪戯に他国の貴族を刺激し、敵を増やすのは得策ではない。

続きを口にしようとしたクロムウエルだが、シェフィールドの、有無を言わさぬ言葉によって遮られた。

「クロムウエルよ。二度も言わすな。“アンドバリの指輪”を渡した恩、忘れたわけではあるまい?」

それはクロムウエルにとっての弱みであるのか、彼は石のように黙りこくってしまふ。

「なに、“レコンキスタ”の仕業と思われなければ良い話だ。傭兵の団があつただろう。あれを使つてはどうだ？」

浮遊大陸アルビオン、レコンキスタ陣営。

そこから、トリステイン魔法学院へと向け、一艘の船が飛んでいった。

第11話 ……ズ様

「……ズ様……ルイズ様……起きて下さい……」

「うーん、実質一時間しか寝てないのよー、もう少し寝かせてよー」

ルイズのこの言葉に、嘘は含まれない。

明日に差し掛かろうかといった時刻。彼女が寝てから、本当に小一時間ほどしか経っていないのだ。
寝てすぐに揺すられ、即座に起床できるほど、彼女は訓練された人生を送ってはいなかった。

「仕方ありませんな……」

梃子でも動かない彼女を一瞥したバラモスは、盛大に溜息を漏らした。

ルイズの部屋の外、廊下側からは、バタバタといった足音が響いている。

それを確認するや、バラモスは黙々と窓枠を撤去し、部屋の主を抱え、夜の闇へと飛び去っていったのであった。

「隊長！ 学生寮の制圧、完了しましたぜ」

トリステイン魔法学院に侵入者の姿あり。

いかにも傭兵、といった彼ら数名は、今回の依頼が容易であったことに喜んでいた。

「学生は捕らえたか？ すると、これで全部か」

隊長と呼ばれた、筋骨隆々の男が、部下へと問う。

彼の体軀はどうみても傭兵でしかないのだが、杖を所持しているところから判断するに、どうやらメイジなのだろう。

「へえ、東側をあたった俺らが最後みたいで」

そう言つて部下の男は、仲間へと視線を向ける。

仲間がすでに、この場へ全員集まっている。それは魔法学院全域の制圧を意味していた。

最後に到着した男の後ろには、数十名の学生が、震えながらも付き従っている。

すでにここ、アルヴィーズの食堂には、大勢の囚われ貴族であふれていた。

メイジと言えど、杖を奪われ、後ろ手に縄をかけられれば、普通の平民と同じなのだ。

「なあに、無闇に立ち上がったたり、騒いだり、我らが困るようなことをしなければ、お命を奪うことはありません。ご安心めされい」

隊長が、集められた学生たちへと声をかけた。
だが、『意にそぐわなければ殺す』と言外に含むその内容に、学生たちの恐怖は募るばかりである。

「……ううっ……ひっく……」

食堂に、女生徒の啜るような泣き声が響いた。

「……泣くな。静かにしろ」

泣き声が癪に障ったのかどうか。隊長が杖を手にする。
なおも泣き止まない女生徒の首へと杖を押し当て、再度低い声を

投げかけた。

「泣くなと言ったんだ。死にたいわけではないだろう?」

果たしてこの脅しによって、かの女生徒は息をするのも忘れ、コクコクと首肯した。

機嫌を損ねれば本当に、殺されていたかもしれない。

「あー、隊長殿といったかの」
「何だね?」

シンと静まり返った食堂に、気の抜けた言葉をかける者がいた。

「女性に乱暴するのは、よしてくれんかね。その、君たちの目的教えてくれると嬉しいんじゃない?」

囚われ貴族は学生だけでなく、教師も含まれる。
中には、学院長オールド・オスマンの姿もあった。

「もし人質を欲して、なんらかのカードにしたいということなら…
…そうじゃな、この老いぼれだけで我慢しなさい」

なるべく刺激しないようにしているのか、平静な口調で話すオスマン。

「はっは、人質なんぞいりませんよ。貴殿らはただ、質問に答えてくれればよいのです。さすればすぐにでも開放しましょう」

「質問、とな……？」

やっていることは、人質を用いた尋問と大差ないわけだが、ともあれ目的さえ達せれば開放されるらしい。

おとなしく恭順し、”質問”に答えたほうが良いと判断したオスマンは、その先を促した。

「そう、この中で、3メートルほどの身長、角兜に山吹色の法衣。青色の肌を持つ亜人を使役している者はいるかね？」

食堂にいた全員が、とある該当者を思い浮かべる。
そのまんまな使い魔を呼び出した、ヴァリエール公爵家の娘、ルイズを。

「かの亜人は犯罪者でね。我々はそれを追っていたわけだ。なあと、召喚者に危害を加えるつもりなどありませんよ。ちょっと事情を伺いたいだけだね」

そういつて隊長は、底冷えのする笑みを、学生たちへと見せた。

「な、何あれ！　なんで賊に、みんな捕まってるの！？」

事件が起きているアルヴィーズの食堂。その外庭では、目を覚ましたルイズが声を荒げていた。

「しーっ。静かにしてください、ルイズ様……」

太い指を自身の口元に当て、ルイズを嗜めつつ、困った顔を見せるバラモス。

常人とは格段に違う、優れた器官を持つバラモスは、当然中で行われている会話も把握していた。

ふと思う。ゾーマ様に言い付かったのが、ルイズ様を守ることだけならば、どれほど簡単であっただろうと。

だがしかしバラモスは、『女生徒全員の護衛』を任されているのだ。

故に、バラモスは悩んでいた。

バラモスは、現在食堂を占拠している隊長に心当たりがあったのだ。

原作より得た知識によると、この隊長の名は、メヌヴィル。

『人を焼くことに快楽を覚える』という、なんとも魔物寄りで趣味の良い、火のメイジのはずである。

そんな好ましい趣味も、立場が違えば災悪となる。

目的が達せられない場合、彼はその趣味を活かした尋問を、開始することだろう。

それをされては困るバラモスは、一体どうやって中の人を助けるかと、いかにルイズを関わらせずに守ろうかと、絶え間なく増える問題に、ほとほと参っていた。

「あら、ヴァリエールじゃない。あなたも上手く逃げられたのね」

騒がしくしたことで、ルイズたちの位置に気付いたのだろうか。ルイズへと、不意に声をかける者がいた。

「無事で良かったですよ、ミス・ヴァリエール」

ルイズが、声がした茂みの方へと目を向ける。

草を割って現われたのは、燃えるような赤髪に抜群のプロポーシヨンをもつ女性と、闇の中でなお光り輝く頭を持った男性だった。

「そ、その子なら知ってるわ!」

一人の女生徒が叫ぶように言った。

今までシンと静まり返っていた食堂だ。その重苦しい空気に耐えられなくなっただろう。

「ほう? お嬢さん。心当たりがあるんで?」

「え、ええ。二年のミス・ヴァリエールよ! この前その亜人を召還してたわ」

「ふむ、ではミス・ヴァリエールさん、とやらはどこだ?」

誤解なきよう言うておくと、この女生徒は、ルイズに対する悪意など欠片も持っていない。

無法者に殺されるかもしれない恐怖から逃れようと、すでに平常

な精神状態ではなかったのだ。

それはメンヌヴィルの、『召喚者に危害を加えない』という発言を免罪符にするほど、追い詰められていた。

メンヌヴィルの言葉を受け、女生徒がきよろきよろと、ルイズの姿を探す。

当の本人は中庭にいるためこの場にはいないのだが、女生徒がそれを知るはずもなく。

「い、いない……」

「いない？ とすると逃げたか……いや、待てよ」

メンヌヴィルがニヤリと、口角をあげながら続ける。

「お嬢さん。あんたがもしない人物を語り、嘘をついてる可能性もあるな？」

「えっ、え、えっ？」

杖を手に取り、メンヌヴィルはその切先を、女生徒へと向けた。

「そ、そんな！ わたし……嘘なんてっ！」

「俺の部下から逃げられるほどの腕を持つ女、それも学生とはな……」

……」

ゆつくりと、火魔法のスペルを唱えるメンヌヴィル。
彼の杖の先には、直径1メートルほどの、ボール状の火が渦巻いていた。

「う、嘘じゃない……！　お願い信じて、嘘じゃ……」
「その女がほんとにいて、そして慈悲深けりや。きっと助けにきてくれるだろうさ」

メンヌヴィルは笑いながら、女生徒へと死刑宣告をする。
女生徒は目を見開き、必死に命乞いを続けた。

しかし彼にとって、話の真贋など、既にどうでもいいことであった。
ただ、目の前の人間を焼きたい。理由なんて、なんでもよかったのだ。

メンヌヴィルの杖が、無慈悲にも振り下ろされた。

女生徒にはそれが、まるでスローモーションのように映った。
目の前の男が杖を振り下ろすのを合図に、大きな、人を丸ごと焼けるような炎が、自身へと迫ってくる。

彼女は、自分の短慮を嘆いた。
喋らず、大人しくしていれば良かった。生徒を売るような、貴族

として恥ずべきことなんてしなければ良かったと。

彼女が死を覚悟した、まさにその時。

地の底から響くような、聞く者を戦慄させる詞が、どこからか聞こえてきた。

「メラゾーマ!!」

“メラゾーマ”とは、魔力を炎の龍へと変化させる“じゅもん”である。

食堂の壁を穿ち、外より来訪した龍は、今まさに女生徒へと迫らんとするメンヌヴィルの炎を、容易く飲み込んだ。

「やれやれ、ですな……」

元は食堂の壁であった部分。

そこは今、メラゾーマによって、ぽつかりと大穴が開いていた。

誰もが注視する中、大穴を通して外より現われたのは、大きな姿

の亜人であつた。

第12話 な、なんだ

「な、なんだてめえは!!」

メンヌヴィルの部下達が声を荒げる。

今も昔も、ごろつきが発するセリフのバリエーションは少ない。
それは例え異世界とて、例外ではないように。

「こ、こいつらがどうなっても良いのかバケモノ!!」

傭兵達が、生徒の首へと杖をあてがった。

3メイルにも及ぶ巨体。壁に大穴をあけた謎の魔法。そして、目の前にいる亜人が放つ威圧感。

それは生きた心地のしないものであった。

「それは些か、困りますな……メダパニ……」

亜人が小さく、呪文を唱えた。

敵1グループを混乱状態にする呪文、それが”メダパニ”。

呪文に気付いていない傭兵部隊の一人が、亜人の言葉にほくそ笑

んだ。

どうやらあの亜人は、こちらに人質がある限り強硬手段がとれないようだ、と。

「いいかあ？ 無事人質を開放してほしくば……」

人質を見た傭兵達の顔から、笑みが失せた。
生徒が、いや、アルヴィーズの食堂にいる全ての人間が、闖入者である亜人、バラモスと同じ外見に為ったのだ。

「ひ、ひい！？ なんだこりゃ！？」

慌てて杖を落とす者、逃げ惑う者。
傭兵部隊がパニックになったのを見計らい、バラモスが三又の手をかざす。

それを合図に、メラゾーマによって穿たれた大穴より、大小さまざまな人影が現れた。

キュルケが あなから とびだした！
コルベールが あなから とびだした！
ルイズが あなから とびだした！

「あら、やっと私の出番かしら？」

杖を出鱈目に振り回す恐慌状態の傭兵たちを、後ろ手に縛りあげていくキュルケ。

「そもそも、正面突破の、戦いなどというものは……くどくど……」

なんとコルベールは、お説教をしているつもりのようだ……。
しかし誰もきいていない！

「確かに私は魔法が使えないから、これくらいしか出来ないけど……」

不平を並べながらも、人質の縄をナイフで切っていくルイズ。
正直手際が良いとは言いがたいが、解放された教師も手伝って、着々と生徒たちは解放されているようだ

このまま収束していくかに見えたその時、事はあらぬ方向へと転じた。

「隊長殿！ 隊長殿俺だ！ メンヌヴィルだ！！」

「……失礼ですが、その……魔物違いでは……？」

搾り出すように答えるバラモス。

「いいや間違いない！ その高温の炎……！ あんたは、俺が捜し求めていた隊長殿だ！」

尚もバラモスへ、熱く語り続けるのは。

「ダングルテール以来、あんたをずっと探してたんだ……」

この事件の主犯格、メンヌヴィルその人であった。

「俺は若気の至りで、隊長殿に挑んだ……その対価がこれだ」

一呼吸置いたメンヌヴィルが、自身の両目を指し示す。
白濁した目は、光を宿していなかった。

「だがな、俺は隊長殿に感謝している。火の使い手であった俺は、視力を失った日以来さらに強くなった」

バラモスへと杖を突きつけ、自信満々にメヌヴィルが述懐した。

「温度を感知する能力で、戦闘において、何にも惑わされることはなくなったのだ!!」

バラモスは悟った。メヌヴィルにもメダパニが効いたのだなど。

「隊長殿！俺を戦ってくれ!!」

「……」

バラモスが逡巡する。

ゾーマ様に頼まれたのは、女生徒の保護だ。

ここで下手に断って、まだ逃げのびていない女生徒を人質に取られては目も当てられない。

「良いでしょう……。表へ出なさい、メヌヴィルよ……」

アルヴィーズの食堂に面した広場。

「では……始めましょうか……」

先導していたバラモスが向き直り、その言葉にしたのを合図に、周囲を殺気が支配した。

ピンと張り詰めた空気。それはバラモスが、久しく感じたことのない、戦闘の臭いだ。

「俺は待っていた……隊長殿とこうして、戦える日をな!!」

素早く詠唱を終えたメンヌヴィルが、文字通り火花を散らす。彼の杖から放たれた炎が、バラモスへと解き放たれ、襲いかかった。

バラモスは避ける動作もなく、全ての炎をその身へと浴びた。大量の炎は今、柱のように天へと燃え盛っている。

「どうした隊長殿！ まさかこれで終わりってことは」

轟々と荒れ狂う火柱、その内より出現した横なぎの手刀により、メンヌヴィルの巨体が宙を舞った。

その衝撃のほどは、舞った巨体が数メートル先の木々をなぎ倒し、ようやく収まるといったところ。

魔王がただ手を振るう。それだけでも、常人にとって一撃必殺の威力を持つのだ。

「面白いぞ……戦いとは、斯くあるべきなのだ……」

火焰を背に、何事もなかったかのように現れたバラモスが、誰にもなく呟く。

平和に身を置き数年。バラモスは、体を駆け巡る魔王の血に打ち震えていた。

「まさかこれで終わりではあるまい、メンヌヴィル……」

ハラハラと木の葉舞い散る先へ、バラモスが、先だってメンヌヴィルが発したセリフを繰り返す。

「ぐっ……へへ、嬉しいねえ……隊長殿は体術もおやりになる、と」

生粋の戦闘狂、メンヌヴィルを表す言葉として、これ以上相応しい物はないだろう。

起き上がった彼の左腕は、ダラリと下を向いていた。

インパクトの瞬間、後ろに飛ぶことで威力を殺したはずが、相殺しきれなかった分があったのだろう。

もう使い物にならなくなった左腕を気にも留めず、杖を構え直すメンヌヴィル。

「今度はこちらから行くぞ……イオナズン……！！」

バラモスが呪文を放つ。

”イオナズン”とは、空中のあらゆる元素を一点に集めて核融合をおこし、敵の群れの中心で大爆発させる大技である。

メラゾーマほどの威力はないものの、拡散型で回避が難しく、バラモスが得意とする呪文の一つなのだ。

襲い来る呪文を、メンヌヴィルは、バラモスに接近することで回避した。

広範囲魔法を術者方面へ回避することは、確かに理に適っている。通常ならば、詠唱後の魔法使いがいるそこは、安全地帯となるだろう。

だが、バラモスへ距離を詰めること、それは先ほどの打撃を、もう一度受ける可能性をも意味するのだ。

しかし、この死をも厭わない行動は、バラモスすら予測が出来な

かった。

四感を研ぎ澄まし、死中に生を求めた結果。並の精神では、到底成し得ない結果。

「くたばれ！ 隊長殿！！」

距離を詰めたメンヌヴィルは、メイス型の杖を大きく振りかぶり、会心の一撃をバラモスへと叩き込んだのであった。

第12話 な、なんだ（後書き）

頑張ります。

第13話 ぐっ……

「ぐっ……ぐっ……」

バラモスが膝を折り、地面へと崩れ落ちる。

たかが人間の攻撃。

しかし、覚悟や想念をのせた、魂を燃やすかのような一撃は、深刻なダメージとなつてバラモスを襲った。

俗にそれを、会心の一撃と言う。

「部下は捕縛……任務も失敗……」

虚ろな目で、現状を呟きつつけるメンヌヴィル。

ほどなくアルヴィーズの食堂から、杖を構えた教師たちが駆けつけてくる。

メンヌヴィルの部隊は、貴族の子弟が揃う魔法学院を襲撃したのだ。

彼がバラモスに勝ったとしても、駆けつけた貴族たちに捕縛され、そして死が待っていることだろう。

「これで、これで終わる……隊長殿に勝てる……」

だが、そんな中であつて、メンヌヴィルは平然としていた。
むしろ笑みさえ浮かべる始末だ。

光を宿さない彼の目は、目の前のバラモスのみを捉えていた。

メンヌヴィルが、魔力を杖に収束させる。

杖に集まったほの赤い光は、やがてその姿を蒼く変化させた。

青い炎。一般的に見られる赤い炎が、より高温になったことを意味する。

「例え今日死ぬとしても……今日は……今日は人生最良の日だッ！
ッ！」

戦いが、メンヌヴィルを成長させた。

彼が、火のスクウェアメイジになった瞬間であつた。

慢心していたのであろうか。

泰平に身を置き、弱くなってしまったのだろうか。

恐らく、両方であろう。

半身を起こしながら、バラモスが齒噛みする。

敵を目前にして、全力を出せない自分が悔しかった。

ぐつぐつと、血が沸き立つ。

「私は……わしは、魔を統べる王……魔王ぞ……！」

咆哮。

バラモスの叫びに呼応し、大気がバラモスを中心に震えた。

重力によって縛られている大地。その欠片たちが、力の奔流に耐え切れず浮かび上がってゆく。

安穩とした日々が作り出した殻を、自らの覇気で打ち破ったバラモス。

奇しくも、バラモス自身もレベルアップを果たすのであった。

「これで終わりだ　隊長殿！」

口火を切ったのはメンヌヴィルだ。

彼の真上には、全魔力を注ぎ込んだ5マイルに及ぶ青い炎が渦巻いている。

正真正銘、彼の全てを賭けた攻撃がバラモスへと向かった。

「メ・ラ・ガイアー！！」

対してバラモスは、未知の呪文を詠唱する。

先ほど魂に刻まれたばかりの、新しい呪文を。

勝敗は、一瞬に決した。

バラモスへと差し迫った青い炎は、超巨大、そう形容するしかない火柱によって飲み込まれたのだ。

広場を覆い尽くさんばかりの炎の円は、メンヌヴィルのみならず、群生していた木々や草花、その全てを飲み込み、天へと立ち昇った。焼け跡には、余燼すら残さなかった。

「使い魔君……実は、彼は」

戦闘後、バラモスへと声をかける者がいた。

声をかけた人物こそ、ダングルテール村に蔓延した疫病を、村ごと焼き払う任務を受けた者。

疫病は上層部による偽りであり、宗教弾圧の為だけに人殺しをしたと知った者。

その後、罪の意識から軍を脱退し、そして教師になった、本物の元隊長殿だ。

「ゴルベーザか……」

「なっ！ 私の名はコル」

バラモスが、その大きな掌で元隊長殿の口を塞ぐ。

「彼は、隊長であつた私と戦い、全力を尽くし、運命を全うした……」

口を塞がれ、目を白黒させる元隊長殿へと、バラモスはなおも続ける。

「そんな結末が、あつても良いんじゃないですかね……」
「君は」

大魔王軍、副魔王、バラモス。

その魔王となりは、風説と大きく異なる。
彼は、にんげんが嫌いではなかった。

第14話 …… あれが

「………… あれが、私の妹？」

ここはガリア領の孤島、セント・マルガリタ修道院。

庭先には樹齢数百年といった、歴史を感じさせる大木がある。

その先端部分では、息を潜め発語するタバサと、大魔王ゾーマの姿があった。

「左様。双子の妹に当たる」

ガリア王家では元来、双子は忌むべきものとされている。

双子による王位継承権を賭けた争いが耐えぬことから、片方を生まれた時点で間引きする風習があるのだ。

片割れを不憫に思ったシャルルは、ガリア近くの孤児院へと、双子の妹を預けた。

やがて成長した彼女は、自らの意思で、セント・マルガリタ修道院の門を叩くことになる。

「……でも、似てはいない」

修道院の窓からは、とある一室が窺える。

室内では一人の少女が、先ほどから膝立ち、いわゆる祈請のポーズのまま微動だにもしていない。

始祖ブリミルへの祈りであろうか。ブリミル教を然して信奉していないタバサと、確かに異なっているかもしれない。

だが、この場合の『似ていない』はもっと別のところにある。

双子であれば酷似するはずの容姿が、姉であるタバサと、全くもって別物なのだ。

何より、腰の辺りまで伸びた流れるような髪は、昼光の下、白と見紛うばかりの銀を湛えていた。

そう、ガリア王家の血を引くものに現れる特徴、青い髪を彼女はもっていなかったのだ。

「フェイス・チェンジによるものじゃ」

読んで字の如く、顔をチェンジする魔法である。その影響は対象の髪にまで及ぶ。

長期的に魔法の効果を発現させる場合、タリスマンなどを依り代

とした、マジックアイテムを携帯するのが一般的だ。

「青い髪の孤児など、どこも持て余すであろう」

そこまで聞き、ようやくタバサにも得心がいく。

重ねての説明になるが、ハルケギニアにおいて青い髪を持つ人は、ガリア王国の血筋なのである。

後に火種になりかねない王族など、とても一孤児院が扱いきれものではないのだ。

「……彼女を確保する、理由」

ルーラの着地点がガリアではなく、ここセント・マルガリタ修道院であったことの、疑問をぶつけるタバサ。

「……戦力の、増強？」

タバサには、ガリア王ジョゼフを討つという野望がある。

スクウェアメイジの父を持ち、トライアングルメイジであるタバサの妹ならば、血統的には申し分ない戦力になるだろう。

ましてやジョゼフは。

「戦力なら間に合っており」

「……でも、ジョゼフは」

「うむ、ここに来る前にも説明したが、確かにジョゼフは”虚無”じゃ」

伝説の系統、虚無。

ゾーマ曰く。もはや伝承にしか記述されていないそれは、例え他の系統を極めたとしても敵わないほどの力を持つという。

つまり、タバサがこの先スクウェアメイジになったとしても、一人ではジョゼフに敵わないことを物語っていた。

「……なぜ」

ゾーマが私一人では敵わないと言っのなら、敵わないのだろう。

戦力が間に合っていると言っのなら、充分なのだろう。

これまでに、ゾーマが起こした奇跡。

ブリミル教徒が始祖ブリミルを信ずるように、タバサはゾーマに一方ならぬ信頼をよせていた。

しかし、言外の行動に関しては、『なぜ』という疑念が募る。戦

力確保でないのなら、なぜここにきたのだろうか。

「タバサ、いやシャルロットの妹ジョゼットを、わしは救いたい
」

タバサ、いやシャルロットが息を呑む。

「わしには見えるのだ。ジョゼフが息絶えれば、ジョゼットが虚無
として目覚める、とな」

シャルロットに、さらに悩むべき『なぜ』が増えた。

「シャルロットよ。ジョゼフが息絶えた先を、想像したことがある
か？」

ゾーマによる、唐突な問いかけ。

首を横に振り、素直に否定の意を示すシャルロット。

それは復讐に囚われ、復讐を最終目標としていた彼女には、無理からぬことかもしれない。

「ガリア王国を治める主が、シャルロットへと代わるのじゃ」
「……私が、ガリア女王？」

そう遠くない未来が、急に色を持ち始める。

「しかし、ガリア女王と瓜二つの、虚無を操る女性を、傀儡にできる者がおるとすればどうじゃ？」
「……まさか」

はつとした面持ちで、シャルロットは視線を妹へと向けた。

「ロマリアが暗躍しておるのだ。ジョゼットを利用し、ガリアを我が物にするための」

ガリアの南に位置する、ロマリア連合皇国。
ブリミル教の総本山として知られるロマリアが、他国を意のままに操ろうと画策している。

もしそれが成るなら、ハルケギニアを揺るがすほどの企みであった。

ハルケギニアの世界では、ブリミル教こそが正義であり、他教は異端として扱われる。

その影響力は甚大で、例えば王族であろうと、ひとたびブリミル教に異端認定されれば、ここハルケギニアで生きてはいけなない。

そして、統一宗教でもあるブリミル教が、ハルケギニアの大国であるガリアと結びついたならどうだろう。

大国ガリアが支持すれば、他国も追従せざるを得なくなる。

ロマリアが悲願、”聖戦”を引き起こすことも可能になるのだ。

始祖ブリミルよりの悲願であるとされる、聖戦。

それは、エルフが守る地、聖地の奪還を意味する。

メイジ10人に匹敵すると言われるエルフは現在、ハルケギニア人にとって、恐怖の対象となっていた。

過去に聖戦が成功した事例は一度もなく、何百万というハルケギニア人が犠牲になってきたが故のものだろう。

ロマリア教皇が「聖戦をしろ」と宣言したならば、それは戦争に参加する何十万人へと、自殺を促していることに他ならない。

それゆえ平時であるなら、ロマリア教皇として聖戦は宣言し辛くもある。

なぜなら、聖戦に参加しない国家があれば、ブリミルの教えに背いたと、異端認定しなければならぬからだ。

ここで全国家が、結託して聖戦に参加しなかった場合、ロマリア

皇国の周りは異端国だけになる。

他国から見れば、ロマリア一国のみが異端の状態だ。ロマリアにとって四面楚歌になってしまうことであろう。

裏を返せば、ガリア王国が参加するという確約さえあれば、ロマリアは聖戦へと乗り出せるのである。

「無論、ジョゼフが王の間は、ロマリアも他の策略を優先する。むしろは、先手が打てるというわけじゃ」

「……ロマリアは、どうやって」

時間的余裕はあるらしい。

次にシャルロットが気になるのは、ロマリアがどのように妹を傀儡にするのか、その方法であった。

聖戦に参加するガリア女王の責任。平常心で重責を担い、実行できる理由など、多く考えつかない。

母がそうであったようにと、心を壊す秘薬の存在が頭を過ぎる。

「やつら姑息にも、ジョゼットの恋心を利用するつもりなのじゃ」
「……？」

シャルロットの言葉足らずな質問にも、意図を読みきった応対で返すゾーマ。

だが彼女には今ひとつピンとこない。

「竜のお兄様などと、よくわからんポジションでせまってわしのジヨゼットを籠絡しようなどと……」

大魔王は、もはや独り言のように、呪詛を呟くロボと化した。

シャルロットにも、おぼろげに把握できたことがある。

不肖の妹は、色恋が理由で私と入れ替わり、女王の大任に就くらしい。

全くもってありえない。さすがにそれはどうかしている。

「わしのジヨゼットに手を出すという発想がそもそも気に食わんかったのじゃ……」

いや、全くありえないと断ずるには、私はまだまだ人生経験が足りていない。

本の中で聞いたフレーズ、恋は盲目、というものであろうか。

「ロマリアが色仕掛けしてくるなら、そうじゃ、いつそわしの色香で……」

なるほど、恋の部分を復讐に置き換えれば、私にも理解できそう待って、今ゾーマが何か言った。

「……ゾーマ？」

シャルロットが隣に目を向けるも、件のゾーマの姿は見当たらない。

慌てて周囲を一望する。

はたして彼女の目に映ったのは、妹の部屋へ向かい、意気揚々と滑空していくゾーマの姿であった。

第15話 だれっ!?

「だれっ!？」

「わしは、ピーターパンじゃ」

遅かった。

シャルロットが視認する先は、怯えた表情を見せる妹と、ハード
ボイルド風を装うゾーマの姿があった。

妹の目は薄っすらと涙ぐみ、その顔色には、はやくここから逃げ
出したいですオーラがありありと浮かんでいる。

押っ取り杖で駆けつけたシャルロットの努力を、まるで嘲笑うか
のように、事態は悪化の一途を辿っていた。

「どうじゃお姫様。ガリアの空をドライブとしゃれてみぬか？」

「その、ほんと、勘弁してください」

「だれも見ちゃおらん！ 太陽以外はの！」

今が好機とジョゼットの腕をぐいぐい引つ張るゾーマ。

だがシャルロットは、今の状況が、どう考えてもチャンスには結
びつかないと判断する。

騒ぎで人が来る前に場を収めなければ。それにこのままでは、妹があまりにも不憫。

「……イル・ウォータル・スレイプ・クラウドィ」

眠りの雲があたりに立ち込めた。

「スリープ・クラウドか」

二人の前では、横になったジョゼットが、可愛い寝息を立てていた。

「……人がきそう、だったから」

言葉少ななシャルロットなりの、精一杯の弁明。

落胆したゾーマの声に、なぜか彼女は、自分が不心得をしでかしたような気分になった。

「確かに騒がしかった。少し焦っておったのやもしれぬ。許せ」

存外あっさりと言い分を吞むゾーマ。

「わしの色香でなびかせるのは、もう少し時間があるときがよいな」

同じアプローチをしたのなら、時間の有無にかかわらず、百発百中で同じ反応しか返ってこないだろう。

思ってもシャルロットは口にしない。優しい嘘ならぬ、優しい沈黙を通す。

「では、ジョゼットには安全な場所へ行ってもらう　バシルーラ」

ゾーマの手が、ジョゼットに向けられる。

夢の世界へ旅立っていた彼女は、お空の世界へ、そして次元の狭間の世界へと旅立っていった。

「……ルーラ？」

「左様、ルーラを対象にかける呪文じゃ」

「……どこへ？」

「わしの居城だ」

なるほど。ゾーマの部下が守っている城は、少なくともここハルケギニアより安全なのだろう。

「では、行くうではないか。ガリア王城へ」

ゾーマの言葉に、シャルロットが気持ちを引き締める。

「……かあさま」

かあさま、そして天国のとうさま。

どうかこのシャルロットを、見守っていてください。

ガリア王城、玉座の間。

謁見などにも使用されるそこは、まだ日が暮れていないにも関わらず、静寂が支配していた。

奥まった場所の座具には、現王ジョゼフの姿があった。

「ジョゼフよ」

「来たか！？ ビダーシャル！！」

おもむろに立ち上がり、背後に突如現れた者へ問いかけるジョゼフ。

彼の喜びようは、その喜色満面な様子から想像に難くない。

「あ、ああ 風の精霊から連絡があつた」

ジョゼフの爛々と輝く瞳に気圧されたかのように、少し引き気味に報告するのは、ビダーシャルと呼ばれた男だ。

茶色いローブ姿に、端整な顔立ち。そしてプラチナブロンドのロングヘアからは、尖った長い耳が覗いていた。

「お前の姪シャルロットと、見たこともない亜人が　この城へ侵入したとな」

「そうかそうか。やはり来たか」

うんうんと一人肯き続けるジョゼフ。

「自分を守る兵士もなく　よく平然としていられるものだな」

ビダーシャルが指摘するように、ガリア王城の兵隊は全て出払っていた。

「城に配せる兵数など、高が知れておろう」

「それでも　相手を疲弊させる効果はあると思うが？」

「ビダーシャルのほうに役に立つと、そう余が判断したまでよ」

それにな、と付け加える。

「エルフと交流があるとロマリアに知られれば、いかな余とて異端審問されよう」

エルフの特徴である尖った長い耳、そして精霊魔法。
ビダーシャルはいずれも有する、生粋のエルフである。

ロマリアが掲げる、聖地奪還。

宗教理念を妨げるエルフは即ち異端であり、異端に与することは教義への反抗を意味する。

それはガリア王として例外ではない。

トリステイン、ゲルマニア、ロマリアの三国が手を結び、ガリアへ攻め入る口実をあたえてしまっただろう。

「そうなつてはお互い、困るのではないか？」

ビダーシャルには、ジョゼフに加担する理由があった。

ロマリアが聖地と呼ぶ場所を、エルフは”シャイターン（悪魔）の門”と呼称している。

エルフの目的は、6000年前に大いなる災厄をもたらしたとして封じているシャイターンの門を、人間の手から守ることにあるのだ。

エルフはメイジ10人分に匹敵する、という有名な言葉。

実際は10人より多くても問題ないのだが、それでも物量で押されれば、いかなエルフとて被害は免れない。

そこでビダーシャルは一計を案じる。

これから先、聖地奪還こと聖戦に参加しないでくれと、大国ガリアの王に直接交渉するべく動いたのだ。

ジョゼフが1人でいるときを見計らった折衝。異端になれと王族に頼むのだ。正直に交渉したところで、普通は決裂する。

それはもし話し合いが不成立になるようなら、エルフの力を行使し、脅す腹積もりでの談判であつた。

しかし、ビダーシャルの考えは杞憂に終わる。幸か不幸か、ジョゼフは大層な狂人だった。

エルフであることを恐れず、あまつさえ『条件を呑む変わりに、余の配下になれ』と、要求まで突きつけてきたのだ。

人間を”蛮人”と蔑んでいたビダーシャルが、初めて人間に興味を抱いた瞬間であつた。

「人払いをしたのは賢明だ　お前がエルフを裏切らない限り、力を貸してやる」

ビダーシャルの宣言と同時に、玉座の間と廊下を結ぶ扉が開け放たれる。

「ほう、なかなか早かったではないか。余の姪シャルロット。そして、謎の使い魔よ！」

ハルケギニア一の知謀家ジョゼフ。
アレフガルドーの大魔王ゾーマ。

両雄、相まみえる。

第16話 謎の使い魔

「謎の使い魔、盤上唯一のイレギュラーよ。名を問おう！」

外套をふあさつ、いや、ぶあさつと靡かせ、ジョゼフが指をつきつける。

1メートル以上も身長差がある相手を指差すさまは、まるで青春の夕日を想起させた。

「わしは、闇の世界を支配する、大魔王ゾーマじゃ」

氣迫をぶわつ、いや、ごわつと溢れさせ、ゾーマが呼応する。

その風圧すら感じさせる邪気をまともに受ければ、低級魔物なら溶け出してしまうことだろう。

「覚えたぞゾーマとやら！ 余の名はジョゼフ。そなたのような者が現れるのを待っておった」

ここ18年というものの、ジョゼフの心が満たされた日はない。

虚無に目覚める前のジョゼフは、魔法も使えぬ落ちこぼれであると臣下臣民に揶揄されていた。

最年少スクエアメイジである弟のシャルルこそが、王の器である

と。

ある日、先代の王が、後継者をジョゼフにすると彼ら兄弟に伝える。

ジョゼフは王になれることを喜ぶよりも、ただただ呆れた。魔法至上主義のハルケギニアで、魔法の天才シャルルではなく、国民にも慕われていないおれを次期王になど、親父もついに耄碌したのか、と。

王に相応しいとジョゼフが認められた理由は、彼の魔法に依らない鬼才、冷徹な判断力が正當に評価されたことによる。

一方で国民に慕われるシャルルは、補佐において力を発揮すると、そう先代の王は判断したのだが。

周りに酷遇され続けてきたジョゼフには、とうとう父の真意を読み取ることが出来なかった。

世間から見れば、兄に王位を奪われる形となったシャルル。

しかし彼は微笑みながら祝福する。「おめでとう兄さん」たった一言。

長年弟に劣等感を抱き続けてきたジョゼフは、この言葉が引き金となり、感情の歯車を狂わす。

ジョゼフが抱くやり場のない怒りは、弟へと向けられた。

「これほど心躍るのは、シャルルを手にかけて以来かもしれぬな」

鬱屈した感情に支配されていたジョゼフは、許せなかった。
劣るはずの兄に王位を篡奪され、なお笑って祝福する弟の態度が、
何より許せなかったのだ。

憎悪が、殺意へと変わるほどに。

そして彼は、魔法以外でも常に競いあっていた好敵手を、自らの
手で殺め、失った。

「……とうさま」

父の名に、シャルロットが反応する。

「シャルロットよ、余が憎ければ憎め。そして、抗ってみせよ！」

ジョゼフが四系統いずれとも違うスペルを紡ぎだした。
五つの力を司るペンタゴン最後の一角、虚無の系統。

「……そうは、させない……ラグーズ・ウォータル・イス」

虚無の魔法は、絶大な威力を誇るかわり発動までの隙が他系統の
比ではない。

完成を阻止すべく、シャルロットも風と水を組み合わせたトライアングルスperl、＜ウィンディ・アイシクル＞を詠唱する。

「……イーサ・ウィンデ！」

シャルロットの眼前に、何十にも及ぶ氷の矢が浮上。
杖を振り下ろす彼女の動きに同調し、全矢がジョゼフを刺殺すべく突き進む。

「カウンター＜反射＞」

ジョゼフへ届くかに見えた氷の矢は、見えない壁に跳ね返され進路を反転。

その勢いを衰えさせぬまま、シャルロットへと飛来した。

「……くっ、ウィンデ」

自分への直撃を、突風を起こすだけの魔法＜ウィンド・ブレイク＞で辛うじて防ぐシャルロット。

彼女は、父の仇討ちを邪魔する者へ、ジョゼフの右隣へと視線を移す。

「……ど、どうして！」

「ご挨拶だな　蛮人の娘よ」

シャルロットが驚くのも無理はない。

父が仇ジョゼフの傍らに立つは、その耳常人より長く、精霊魔法に長けた種族。

「私はエルフのビダーシャル　蛮人の魔法など、精霊魔法カウンター＜反射＞には通じぬ」

左掌を前に構え、ビダーシャルが言い放つ。

形容するなら、ヘクサゴンを幾重にも繋ぎ合わせた壁。

薄っすら可視できる程度のバリアが、彼の前面に展開していた。

「そして、余の虚無＜加速＞も、完成を見た！」

言つや否や。

あまりの速度に残像すら残し、右へ左へと転位するジョゼフ。

「シェフィールドがくるまでの戯れのつもりだったが……やめだ」

ジョゼフの声が５・いちサラウンドで響き渡った。

虚無とエルフ。

対する者にとって、およそ絶望でしかない２つの要素。

しかし、どんなに困難で挫折そうな状況でも、シャルロットは決して諦めない。

「光栄に思え！ 余の全力をもって応えてやる！」
「……ラグース・ウォータル・デル・ウィンデ！」

シャルロットが素早くスペルを紡ぐは、＜アイス・ストーム＞の名をもつトライアングルスペル。

氷の粒が混ざった竜巻を、前方に発生させる広範囲魔法だ。

精霊魔法の盾とは言え、隙があるかもしれない。

例え素早く動けても、攻撃範囲を広げれば、動きを封じられるかもしれない。

シャルロットが『かもしれない魔法』で対抗する。

毎秒100メートルをゆうに超える竜巻が、部屋狭しと吹き荒れる。もはや自然災害レベルの力を前にし、ジョゼフは余裕すら感じる笑みを浮かべた。

「ふははは！ 余は補助魔法的な力＜加速＞によって、このようなことも可能なのだ！」

何を思い立ったか、竜巻の真っ只中へと進入するジョゼフ。

暴風荒れ狂い、飛び交う氷の粒を掻き分けるように、彼は縮地を繰り返した。

もはや身体能力向上だけでは説明のつかない動きだ。

「精霊の補助魔法的な力によるカウンター＜反射＞には 隙などない！」

ビダーシャルが、迫り来るアイス・ストームに向かい、壁を展開する。

「今じゃ！ いてつくはどう！」

ゾーマの指先から、凍てつく波動がほとばしった！
ゾーマは補助魔法的な効力を、全て消し去った！

「何！？ 余の加速、が……ぬわーっ！」

竜巻の中、急に通常の動きとなったジョゼフは、体中を氷の粒で叩かれ、宙に舞った。

「馬鹿な！ 反射がきかな ぐふっ！」

同じく、暴風へと巻き込まれるビダーシャル。

ガリア王城、玉座の間。

氷の粒前線が過ぎ去った跡地には、ガリア王ジョゼフ、エルフビ
ダーシャルが横たわっていた。

第17話 これが実際

”これが実際に起こった光景だと？ バカな！”

横たわったまま、何事かをつぶやき続けるジョゼフ。

「……あれは？」

「走馬灯、のようなものであろう」

ジョゼフは既に良き絶え絶えといった様子ながら、シャルロット、ゾーマに見えぬ何かに語りかけていた。

”いいんだ”

いや、ゾーマには見えていたのかもしれない。

”知ってる、わかってるよシャルル”

なぜならジョゼフのこの奇行は、ゾーマがジョゼフの『アイテム』を使ったことから始まる。

”どう考えたって、王にふさわしいのはお前だ。だってお前は、あんなに魔法ができるじゃないか”

ガリア王家に代々伝わる秘法、土のルビー。

”だからな、おれがお前を王さまにしてやる。おれは大臣となつて、お前を補佐しよう”

ゾーマは、ジョゼフの手より土のルビーを抜き取り、アイテムとして使用した。

”おれとお前は同じだった。それでおれには十分なんだ”

「さしずめ、『兄弟の思い出』と言ったところであるか」

ゾーマが目細めながら、薄く笑った。

適切な場所で、思い出のアイテムをつかう。
ただそれだけで、アイテムは人の思いに込えてくれる。

過去にも、咎なくして死んだ男と恋人の魂を、思い出のペンダントが繋いだ。

ゾーマが支配していた世界、アレフガルド。そのアレフガルドに隣接している他世界、通称『上の世界』において、実際に起こった出来事だ。

つくづくにんげんとは不思議な生き物であるなと、ゾーマは思った。

” おれたちで、このガリアを素晴らしい国にしようじゃないか ”

” おれたちならできるよ ”

” なあシャルル ”

” なあシャルル…… ”

ふと、ジョゼフの目に精気が戻る。

「シャルロット、か」

ジョゼフが、目線だけを右側へ、シャルロットへと向ける。
もはや体を起こすこともかなわないのだろう。

震える右手にのみ活を入れ、王の証である冠を自ら掴み、シャル
ロットの足元へと置いた。

「……これは」

「長いこと、大変な迷惑をかけた。詫びのしるしにもならぬが……、
受け取ってくれ。お前の……父のものになるはずだったものだ……」

王冠に添えられていたジョゼフの右手が、コトリと地面に落ちた。

「どうじゃ、シャルロットよ」

多くは語らない。

「……よくは、ない」

語らずとも、ゾーマが何を問うているのか、その意味は理解できる。

復讐は決して、後味の良いものではなかった。

しかし、これでやっと先へと進める。

シャルロットは、自身を縛り付けていた鎖のようなものが、ガシヤガシヤと崩れていく音を聞いた。そんな気がした。

「……父さまと、伯父王ジョゼフには」

そう、彼ら二人には、娘のシャルロットですら入り込めない、何かがあったのだ。

「……今さら」

考えても詮無きことと、シャルロットは思いを振り払う。

例えどんな事情があったとしても、ジョゼフを赦すことはなかっただろう。

そして、その復讐は今、終わりを告げた。

父さま……シャルロットはついに、仇を　。

「さあ、我が腕の中で泣くがよい！」

ゾーマにしては、ほぼ完璧なタイミング。
非の打ち所のない切り出しにも関わらず、シャルロットが胸に飛び込んでくることはなかった。

「……ゾーマ」

手で軽く涙を拭うシャルロット。

彼女が代わりに見せたのは、未来を夢見る、少女の笑顔であった。

辺りはすっかり暗くなっていた。
シャルロットの<アイス・ストーム>により、天井があつた場所からは月の光が差し込んでいる。

「……ゾーマ、戦闘魔法は？」

かねてよりの疑問を口にするシャルロット。

今まで一度も、戦闘魔法を使うゾーマを見たことがないと。

「にんげんは殺さぬようと、配下の魔物に法令を出したことがある。よもや大魔王みずから、その禁を破るわけにはいかぬ」

「……そう」

極めてあっさりと答えは出た。

ゾーマの持つ邪悪そうな容姿が、月の光を受けて怪しく光り輝いている。

シャルロットの目にはそれが、まるで聖なる者が如く、神々しく映った。

シャルロットが目を擦る。

気のせいだろうか。

ゾーマの背後、風景が動いた気がしたのだ。

改めて見なおし、そして気づく。

人ほどの大きさの何者かが、ゾーマに向かってきている。その手には短剣が握られていた。

「……危ない！」

咄嗟に杖を構えなおすシャルロット。

間に合わない！

吹き抜けとなった玉座の間に、キーンと、まるで金属音のようなものが響き渡った。

「シェフィールドか……」

「ジョゼフ様も死に、故郷にも帰れず、わたしにはもはや何もない！」

ゾーマに体を預ける形の、人影。

それは、ジョゼフの使い魔シェフィールドであった。

手に握る短剣は、根元より破断されている。

もはや『虚無の使い魔』が力もない、ただの女性であるシェフィールド。

彼女の刃では、ゾーマの『闇の衣』を切り裂くことはかなわなかったようだ。

シェフィールドは、ゾーマによってその腕を掴まれ、もはや逃げることにすら儘ならなかった。

「殺せ！」

進退窮まったシェフィールドの、最後の矜持。

主人の後を追うことで、使い魔の役目を終えようというのだろう。

「……でも、ゾーマは」

人を殺さないと言っていた。

先ほどのゾーマの言葉を、反芻するシャルロット。

「見えるかシャルロットよ。これが、復讐の生み出す鎖じゃ。誰か

が断ち切らねば、それは円環となるであらう」

その言葉に、シャルロットがはっとする。

私が未来に進める分、過去に縛られる人がいる。この人がまさに、
そうなのであらう。

今まで見えなかったが、対象が天涯孤独でもない限り、必ず起こる自然の摂理に違いない。

私が仇討ちを成さないなんて結末は、とうてい想像できない。

だがこの輪廻は、いったい誰が止めるといえるのだろうか。

力の弱き者だろうか。心が強き者だろうか。

私には、わからない。

シャルロットが、遅疑逡巡した。

「大丈夫じゃ。大魔王に逆らった代償は、この者に払わせる。その
うえで、この鎖ごと断ち切ってくれよう」

シェフィールドの腕をとり、ジョゼフのところまで歩を進めるゾ
ーマ。

「……どう、やって？」

「わしの呪文で、シェフィールドを遠く東方くロバ・アルカリ・イ
エ>まで飛ばしてくれるわ」

さらにゾーマは、懐から小さな葉っぱのようなものを取り出し、
それをジョゼフの口奥深くへと押し込んだ。

「ジョゼフの死体を、”アンドバリの指輪”で動かされてもかなわ

ぬな。もろとも東方へやれば、帰ってはこれまい」

「待て！……お前は一体！」

「バシ・ルーラ！」

シエフィールドの抗議もそこそこに、二人の体は、まるで宙へ引
つ張られるかのように浮かび上がる。

やがてジョゼフを伴った彼女は、空中で次元の狭間へと飲み込ま
れた。

「……茶番」

「バレておったか」

どこか罰の悪そうな顔をするゾーマ。

「幸せこそ、我が悦びじゃからな」

文頭に『女の子の』とつけなかっただけ、成長したのかもしれない。

「……あの葉は？」

「あれは……本の栞にしておったものじゃ。平和の象徴にと献上さ
れたものでな……」

正直に言うべきかと、言いあぐねるゾーマ。

ゾーマがいた世界のどこかにある、世界樹という大木がつける葉
は、死者を生き返らせる効能があるという。

果たしてゾーマが使ったものがそれであったかは、対象が東方へ

行った今となって、シャルロットに知るすべもない。

「お姉さま！ シルフィを置いていくなんて酷いのね！ きゅいきゅい！」

「……あの子」

一難去ってまた一難。

天高く風竜が、シャルロットの元へと向かってきている。
人の言葉を発しながら。

一気に痛くなる頭を抑えながら、ゾーマの様子を上目遣いに伺う
シャルロット。

「本物の使い魔がきたようじゃな。わしは、ルイズの元へと帰るぞ」
だが「人語を解する風竜がいるか」などといったツツコミはない。
シルフィなる風竜が、実は絶滅危惧種の韻竜であることなど、今
さらゾーマには説明するまでもなかったのだらう。

「これからが大変じゃ。よき王女であれ。……シャルロット王女よ
ルーラ！」

「……ありがとう」

飛び去るゾーマの背中に、届くか届かないかの声で、シャルロットは呟いた。

激動の数日間。

その感傷に浸る彼女の耳に、きゅいきゅいきゅいきゅいと言いつけた使い魔が、大きめの杖でポコリと殴られたことは言うまでもないだろう。

ともあれ。

この日、ガリア王国にあらたな王が、誕生したのであった。

第18話 ルイズもさぞ

「ルイズもさぞ、寂しがつておるであらうな」

ゾーマはご機嫌だった。

その足も軽やかに、るるるらんと聞こえてきそうなステップだ。

久々のトリスティン魔法学院。

ハルケギニア中の綺麗どころを集めた園は、ゾーマにとってのアルカディアなのだ。

「む、あそこに見えるはバラモスではないか」

魔法学院の門から中ほどへ通じる広場では、3マイルを超える巨体と、それを囲む生徒たちの元気な姿があった。

「わしの留守中しつかりとやっておったようじゃな。バラモ

「ねえ、バラモスさま！ このあいだは悪漢から助けていただいて、とても感謝してるんです。そこで……」

くだんのバラモスに迫るは、茶色のマントを羽織り、長い栗色の髪を、可愛らしくふりふりさせる少女。

彼女はその手にもっていた包みを、すっとバラモスへと手渡した。

「ビスケットを焼いたんです、お礼になるかわかりませんが、是非食べてくださいね」

茶色のマントは1年生の証。

少女の名は、ケティ。

ギーシュ二股事件、被害者の一人だ。

メヌヌヴィル部隊襲撃から二夜。

ケティはバラモスのことを、命の恩魔物から一足飛びに、英雄視していた。

「これはこれは、わざわざすみません……」

尖った三つ又の指先で、ビスケットの包みを手に取るバラモス。バラモスの立派な体軀では、どうしても摘まむように受け取ってしまう。

「ありがたく、喰らいつくさせていただきますよ……」

大きな手のひらに、ちょこんと載せた包み。

ビスケットなど腹の足しになるのか、など問題ではない。

元の世界において、にんげんから善意を向けられたことがないバラモスにとって、好意そのものが嬉しいのだ。

「ダーリン、あたしの微熱が燃え上がっちゃったみたいなの」

ビスケット作戦で相好を崩したバラモスの、横面の横。

魔法により空中に浮いた褐色の肌に赤髪の女生徒が、色気を振りまきながらバラモスの首へと手をまわした。

彼女はその豊満な巨乳を、ぐいぐいバラモスの顔へと押し付け、艶っぽい声でアダルティーンな空間＜ゾーン＞を作り出す。

「ちょちよつとキュルケ！ バラモスは私の使い魔なのよっ！」

キュルケゾーンを軽快にぶち壊すは、目を吊り上げ、怒りをあらわにしたピンクブロード髪の少女。

言わずと知れた、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールである。

キュルケは自らの足を文字通り引つ張るルイズに、抗議の声をあげた。

「あら、ダーリンは正式な使い魔じゃないんでしょ？　ね、ダーリン？」

「だからと言って、キュルケのものでもないじゃない！」

「いやはや……。弱りましたな……」

キュルケの指先で顎をつつとされ、バラモスは困った表情を見せる。

バラモスには眉毛がないため、眉尻を下げるとは言えないかもしれないが、おおよそそのあたりの部位を下げた。

バラモスにはんげんとの交流を、今まで威圧をもっておこなっていた。

威圧外交である。

単純に、慣れていないのだ。

こうして好感をもって、騒がれることに。

はにかみ魔王として、魔法学院を風靡しそうな勢いがあるとも、根はバラモスのままなのだ。

「だいたいね！　バラモスにはその……あうあう」

訳『バラモスが見せた爆発魔法は、私の魔法に応用できるかもしれないわ！　これから主として、あの魔法について聞くんだから！』

ルイズが”あの魔法”と思い表すのは、バラモスが見せた”イオナズン”のことである。

どのような魔法を使っても、爆発ばかりのルイズ。
しかしルイズは、イオナズンに可能性を見た。
爆発が、凄まじい攻撃力を生み出したのだ。

失敗失敗と小さい頃から罵られ続けたことは、彼女から失敗を攻撃に転化する発想を奪っていたのだらう。
でも、気づいた。知った。

使い魔に教えを請う姿を、他人に見せるなど、貴族のプライドに係わるとしたルイズは、なんとかバラモスだけを連れ出したいと考えていた。

だが一昨日の活躍以来、にんき人氣に衰えを見せないバラモスを、説明もなく人氣ひとけのない場所に連れて行くことはなかなかに難しい。

毎回、期せずしてお邪魔が入り、あうあうとここ二日を無為に過ごしていたのだ。

「ちょっと良いかねバラモス君。この炎を使ったからくり」蛇くん”についてなのだが」

変わり者として知られる教師コルベールが、自身の発明品をアピールする。

メンスヴィルの一件以来、バラモスに心許したのだろうか。
並み居る女子戦線をもとめせず争奪に参加する中年男性の勇姿

は、他の女生徒をドン引きさせるに至る。

ともかく。

「なん……じゃと……」

ゾーマの目の前には、信じられない光景が広がっていた。
うら若き乙女たちが、私よ私よとバラモスを取り合っていたのである。

若干一名の男性を除いて。

ゾーマの足には、もう力など入っていない。
ふらふらになりながらも、何が起こったのか確認するため、その歩みを喧騒の場へと進めていた。

「あ、ほら！ ルイズの本当の使い魔が戻ってきたじゃない！」
「げー！」

目ざとくゾーマの姿を発見したのはキュルケだ。
これで競争相手が一人減ったと、女生徒たちの目が、黄色い菱形

の輝きをみせた。

「おお、ゾーマ様……！」

ゾーマの存在に気づいたバラモスが、人を掻き分けゾーマへと歩み寄る。

話題の中心魔物バラモスの動きに、何が起ころのだろうか、場を沈黙が支配した。

「お帰りを、お待ちしております……」

バラモスが、ゾーマに対し恭しく礼をする。

臣下が王に対してするそれだ。

バラモスのこの行動をもって、今まで静かにしていた女生徒たちが、にわかにどよめきを起こしだした。

キヤーキヤー、キヤーキヤー！ と。

「あ、あれ？ だ、だって、あれ？ ゾーマって、あのルーンで痛がつてた使い魔でしょ？」

「カエルの使い魔でもケロケロなルーンで絶叫してた、あの使い魔よ！」

「でもバラモスさまが……、もしかしてゾーマ、さま？ も凄い、のかも……？」

「ないない、それはないって！」

ややあつて。

女生徒の喧々囂々たる論議にも、一応の解決を見る。
結論。ゾーマのことは、ひとまず棚上げにしよう。

「そんなことより、ダーリンはこれから用事あるのかしら？」
「そんな……な……」

ゾーマの目の前がぐにゃーんと歪む。

「用事がなかったとしても、キュルケなんかには付き合わないわよ！
バラモスは私の使い魔なんだから！」

「ぐふっ！」

「ゾーマ様、ゾーマ様……！ どうしました……！？ 大変だ、ゾーマ様が血を吐かれた……！」

ゾーマは、意識を手放した。

第19話 お目覚めで

「お目覚めですか、ゾーマ様」

自分と呼ぶ声に、ゾーマが目を覚ますと、そこには見知った空が広がっていた。

太陽はすでに中天ほどまで移動している。

魔法学院の広場だ。

広場で寝ていたのだろうか。

「アークマージか。なぜここにおる」

「僕もゾーマ様のお力になりたいと思い、馳せ参じたのですよ」

アークマージは、紫の法衣を頭より被った奇抜なコーデに身を包んでいる。

表情は伺えないものの、大げさな身振り手振りでその思いを表した。

「そろそろゾーマ様に危機が訪れるかと思ひまして。あ、これは僕の推理なのですが、ゾーマ様の体格では医療施設へ入ることが」「いやよい。ところで、シヨゼットは無事わしの城に着いたか？」

「ええ、ジョゼット様なら”だいまじん”が護衛していますよ。僕の推理によりますと、ゾーマ城はまだまだ安全ですから」
「そうか……」

ゾーマが、なんとも言えない相形を見せる。

まずもって問題があつた。
なぜ広場に倒れているのか。
そこから解決しなければいけない。

わしはシャルロットを救い、ここトリスティン魔法学院へルーラで飛んだはずじゃ。

魔法学院入り口よりバラモスの姿を見つけ、そこで、

「わっはっは！ どうやら、悪い夢を見ていたようじゃな！」
「と、言いますと？」
「いやな、バラモスのやつがモテモテになっておつた。はっは、夢とはいえありえぬことじゃ」
「ああ、そのことでしたら」

アークマージが告げる。

「夢ではありませんよ」
「危なっ！」

ゾーマはひらりと身をかわした。

ゾーマの後方に位置する木には、『夢ではありませんよ』の文字がめり込んでいる。

驚くなかれ。大魔王クラスになると、聞きたくない言葉を音速でかわすことも可能なのだ。

「言葉でわしを害そうなど、アークマージ貴様」

「いえ、別にそのようなつもりは」

「まあよからう。ところで、バラモスはどこじゃ」

見渡すも、広場にバラモスの姿はない。

主を放っていないくなるなど、まるで魔物の所業ではないか。

「バラモス様でしたら、先ほどまでここで薬草を煎じておりました。今は水を汲みに、給水所へ行かれましたよ」

「やくそうじやと？」

「ええ、ゾーマ様が吐血なされたと、それは大慌てでしたから」

なるほど。バラモスは大変、忠義の魔物じゃな。

思い、舌の根の乾かぬうちに轉身。

ふと、ゾーマが何かを思いついたように、頭上をピコーンとさせる。

「うむ、『忠誠には報いるところがなければなりません』とは、わしが敬愛する人物の言葉じゃ。このとおり回復した。労いに行つてやろう」

「ですが」

「よいよい、わしが行くと言つておる」

アークマージめ、変に気をまわしおつて。

しかし。

わし自ら出向いたら、バラモスのやつどつという表情を浮かべるであらう。

恐れ多くも勿体無くも、といった顔であらうか。
なにしろ忠義の魔物であるからな。

ゾーマが心ともなく一笑した。

思考ながらの移動は、ともすれば時間を跳躍する。
気づけば給水所も程近く。

「む、あそこに見えるはバラモスではないか、バラモ」

「ありがとうございます！」

くだんのバラモスに迫るは、黒髪メイド、シエスタの姿であった。

「いえいえそんな、案内をしてくれた御礼ですよ……」

「謙遜なさらないください。先日は怖い人たちから、私たち平民も助けてくれましたし、今日もほら、食堂からの荷物運びを手伝っていただけました」

「ついで、ですよ……」

「私、感動しました！ 貴族さまからも人気なのに、平民にも分け隔てなく優しいなんて」

シエスタが思わず涙ぐむ。

「弱りましたな……」

朝方バラモスを取り囲んでいた生徒たちは、授業へと向かいこの場にはいない。

女性の涙に弱い。

それは魔物とて例外ではなく。

バラモスはこの、誰の助けも受けられぬ状況と、慣れぬ女性の涙に、ほとほと困り果てていた。

「なん……じゃと……」

果たして、ゾーマの目の前には、信じられない光景が広がっていた。

バラモスとシエスタが何やら語らっているのだ。

その様子を目撃してしまったゾーマの身に何が起きたのか、もはや詳しく説明するまでもないだろう。

ゾーマの足に、もはや力など残されていなかった。

ゾーマはガクガクと、まるで生まれたてのトムソングゼルのようにガクガクと足元を揺らしたのだ。

「お、おや……！ これはこれはゾーマ様……！ もうお体は大丈夫で……？」

ゾーマの姿をいち早く発見するバラモス。

ゾーマが息災なことに安堵し、助け舟がきたことに安堵した。

「この、亜人は」

シエスタが、ゾーマをまじまじと見つめる。

忘れるはずもなく、貴族に絡まれたシエスタを助けた亜人、その魔物だ。

シエスタにじつと凝視され、先ほどのトムソンガゼルはどこへやら、恥ずかしそうにくねくねと身をよじっているが間違いない。

「先ほど言った、ゾーマ様ですよ……。とても素晴らしい、大魔王様です……！」

さすが忠義の魔物バラモス。

よいぞ、もっと援護射撃をするのじゃ。

などと考えていたかどうか、ゾーマが、おもむろに機嫌を上向けた。

「するとゾーマさんが」

「ええ、この気つけのための水を用意しようと思っていたお方で……。しかし、必要なかったようですね……。元気なお姿を見て安心しました、本当に、よくぞご無事で……」

「うむ。心配をかけたな、バラモスよ」

殊勝な顔を見せつつ、労いの言葉をかけるゾーマ。
謙虚そうな態度からは窺い知れぬ、ゾーマの喜悅はいくばくか。

完璧じゃ！ この上下関係を見せれば、わしがいかに偉大か、シエスタに伝わったであろう。

ゾーマがちらつちらつとシエスタを見遣る。
だが、しかし！

シエスタの反応は、ゾーマの予期せぬものであった。

「なるほど！ バラモスさんは、忠義にも熱い亜人さんなのですね！ 素敵です！」

「ぐふっ！」

「ああ、またゾーマ様が血を吐かれた……！」

意識という幻想。
意識は遅れてやってくる。

ゾーマは、シエスタの言葉を賛美と予測し、聞き漏らすことなく受け止めようとした。

無意識に聞く態勢となったゾーマの体へ、脳が命令する「危険だッ よける」と。

しかし、あるかなしかのその隙間、無意識の一瞬を突かれたのだ。

果たして、倒れ行くゾーマの胸元には、『バラモスさん素敵です！』の文字が深く、深く突き刺さっていた。

第19話 お目覚めで（後書き）

意図的に、会話文を増やしてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9537m/>

ゼロの使い大魔王

2011年6月20日18時16分発行